松山市文化財調査報告書 85

伊台惣部遺跡

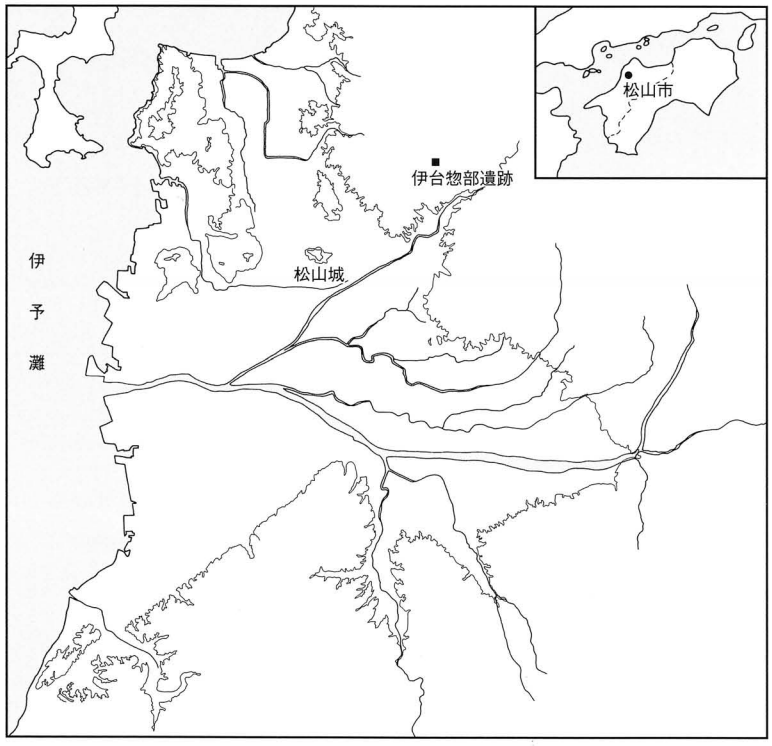
2002

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

伊台惣部遺跡



2002

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	いだいそうべいせき
書名	伊台惣部遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第85集
編著者名	梅木謙一
編集機関	松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１　ＴＥＬ（089）948-6605 埋　文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　ＴＥＬ（089）923-6363
発行年月日	西暦　2002年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
伊台惣部遺跡（いだいそうべいせき）	松山市下伊台町（まつやまししもいだいまち） 1105番地	38201		33° 52′ 15″	132° 48′ 15″	19880901 ～ 19881119	8,100	新設校建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊台惣部遺跡	集落	弥生 古墳 古代	性格不明遺構 竪穴式住居址 掘立柱建物	弥生土器・石器 土師器	絵画土器

序

本書は、昭和63年度に実施しました新設の松山市立旭中学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

松山城から道後温泉までの道後城北地区は、弥生時代における松山平野の中核集落が存在した場所であることが、近年の調査・研究で明らかになってきました。今回報告します旭中学校が所在する伊台地区は、道後城北地区の北に位置し、丘陵と谷部とで形成された地域になります。特に、道後城北地区と接する丘陵部は、眼下に松山平野が一望され、後期古墳が群集する地帯として知られています。

今回の調査では、弥生時代～古代の集落が確認され、伊台地区の古代集落の実態がはじめて明らかになってきました。特に、古墳時代前半期の竪穴式住居址からは、完形の土器や木炭が出土し、当時の生活の様子が詳細に判明する資料が得られました。

こうした成果をあげられましたのは、関係各位の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜であり、厚く感謝申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、生涯教育の向上に寄与できることを願っております。

平成14年３月29日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　中村時広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会が昭和63年９月に実施した松山市下伊台町1105－１に所在する伊台惣部遺跡（現、松山市立旭中学校）の発掘調査報告書である。
また、本書では、関太郎氏が道後地区で採取した資料についても報告する。

2．刊行組織〔平成14年３月29日現在〕

松山市教育委員会	教育長	中矢　陽三
事務局	局長	大西　正氣
	次長	川口　岸雄
	企画官	一色　　巧
文化財課	課長	馬場　　洋
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	江戸　　孝
	事務局次長	森　　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　　隆
	専門監	野本　　力
	調査係長	西尾　幸則
	調査主任	栗田　正芳（文化財課職員）
	調査員	梅木　謙一
		大西　朋子

3．遺構は呼称名を略号化して記述し、竪穴式住居址：SB、掘立柱建物址：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴・小穴：SP、性格不明遺構：SXとした。

4．遺物の実測・製図、遺構の製図は梅木謙一の指示のもと、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝、平岡華美、山之内聖子、吉岡智美が行った。

5．遺構図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

6．本書に使用した方位は磁北である。

7．遺構の撮影は担当者が行い、遺物の撮影は大西朋子が担当した。

8．本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵・保管している。

9．本書の執筆と編集は、梅木謙一が行い、水口あをいの協力を得た。

10．製版　写真図版－135線
印刷　オフセット印刷
用紙　マットコート
製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　伊台惣部遺跡 …… 2
第２章　関太郎氏採取資料 ……31
第３章　調査の成果と課題 ……58

挿　図　目　次

第１章　伊台惣部遺跡
第１図　調査地周辺の遺跡分布図（縮尺１/25,000） …… 3
第２図　調査地測量図（縮尺１/1,500） …… 4
第３図　A・B区土層図（縮尺１/50） …… 5
第４図　遺構配置図（縮尺１/300） …… 7
第５図　SK４測量図・出土遺物実測図（縮尺１/20・１/４） …… 9
第６図　A区出土遺物実測図（縮尺１/４） ……10
第７図　SX１測量図・遺物出土状況（縮尺１/40・１/６） ……11
第８図　SX１出土遺物実測図(1)（縮尺１/４） ……12
第９図　SX１出土遺物実測図(2)（縮尺１/２・１/４） ……13
第10図　SD３出土遺物実測図（縮尺１/４）
第11図　SB５測量図（縮尺１/40） ……14
第12図　SB５遺物出土状況（縮尺１/40・１/６） ……15
第13図　SB５出土遺物実測図（縮尺１/４） ……16
第14図　SB２測量図・出土遺物実測図（縮尺１/40・１/３・１/４） ……18
第15図　SB３・４測量図（縮尺１/40） ……19
第16図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１/60・１/２・１/４） ……20
第17図　B区出土遺物実測図(1)（縮尺１/４） ……22
第18図　B区出土遺物実測図(2)（縮尺１/３） ……23
第19図　B区出土遺物実測図(3)（縮尺１/２・１/３） ……24
第２章　関太郎氏採取資料
第20図　関氏資料採取地点（縮尺１/8,000） ……32
第21図　A地点出土遺物実測図(1)（縮尺１/４） ……33
第22図　A地点出土遺物実測図(2)（縮尺１/３・１/４） ……34
第23図　B地点出土遺物実測図(1)（縮尺１/４） ……36
第24図　B地点出土遺物実測図(2)（縮尺１/３・１/４） ……37
第25図　C地点出土遺物実測図(1)（縮尺１/４） ……38

第26図　C地点出土遺物実測図(2)（縮尺１/４）……39
第27図　D・E地点出土遺物実測図（縮尺１/３・１/４）……40
第28図　地点不明遺物実測図（縮尺１/３・１/４）……42

表　目　次

第１章　伊台惣部遺跡
表１　竪穴式住居址一覧……25
表２　掘立柱建物址一覧
表３　出土遺物観察表（土製品）……26
表４　出土遺物観察表（石製品）……30
表５　出土遺物観察表（鉄製品）

写　真　図　版　目　次

第１章　伊台惣部遺跡
図版１　１．調査前遠景(1)（北より）
　　２．調査前遠景(2)（南より）
　　３．調査地現況（北より）
図版２　１．A区の調査(1)（西より）
　　２．A区の調査(2)（東より）
　　３．SK４遺物出土状況（北西より）
図版３　１．SX１遺物出土状況（北東より）
　　２．B区の調査（北より）
　　３．SB３・４完掘状況（北より）
図版４　１．SB５遺物出土状況(1)（東より）
　　２．SB５遺物出土状況(2)（北西より）
　　３．SB２・掘立２完掘状況（北東より）
図版５　１．掘立１完掘状況（南西より）
　　２．掘立５・６完掘状況（北より）
　　３．現地説明会（西より）
図版６　１．出土遺物（SX１・SD３・SB５）
図版７　１．出土遺物（SB５）
図版８　１．出土遺物（SB２）

2．出土遺物（掘立１・B区包含層）
図版９　１．出土遺物（掘立１・B区）
第２章　関太郎氏採取資料
図版10　１．A地点出土遺物
図版11　１．B地点出土遺物
図版12　１．C地点出土遺物(1)
図版13　１．C地点出土遺物(2)
２．D地点出土遺物
図版14　１．出土遺物（E地点・地点不明）
図版15　１．地点不明遺物

写　真　図　版　デ　ー　タ

１．遺構は、35㎜判で撮影した。

２．遺物は、４×５判または69判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影したが、原色図版および伊台惣部遺跡No.17・関資料No.37・52は、カラーでも撮影している。

使用機材：

カ　メ　ラ　　トヨビュー45G・69ロールフィルムホルダー
レ　ン　ズ　　ジンマーS240㎜Ｆ5.6他
ス　ト　ロ　ボ　　コメット／CA32・CB2400
スタンド他　　トヨ無影撮影台・ウェイトスタンド101
フ　ィ　ル　ム　　白・黒　コダックプラスXパン
カラー　コダックエクタクロームEPP

３．白黒写真は、等倍で印刷原稿に使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引　伸　機　　ラッキー450MD・90MS
レ　ン　ズ　　エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜Ｆ2.8N
印　画　紙　　イルフォードマルチグレードⅣRC

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1～12

［大西　朋子］

第1章　伊台惣部遺跡

Ⅰ　はじめに

1．調査・刊行に至る経緯

昭和63年９月～11月に、松山市教育委員会文化教育課は、市内下伊台町1105－１に新設する松山市立旭中学校建設に伴う発掘調査を実施した。

調査は、校舎予定地に対して行い、弥生時代～古代の集落跡を確認するにいたった。本格的な整理作業と報告書の作成は平成13年度に行った。整理作業から報告書作成までの間では、当時の調査担当者や関係者には多くの助言と指導を受け、できるだけの資料化につとめた。くわえて、資料の充実化のために関係機関を訪ね簡易分析と指導を受けた。

さて、伊台惣部遺跡の概要は、既に『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』に収録されているが、その後の整理で遺構の時期や数量に変更が生じているので、注意していただきたい。

2．調査要旨

調　査　地　松山市下伊台町1105番地１
遺　跡　名　伊台惣部（いだいそうべ）遺跡
調査期間　昭和63年９月１日～同年11月19日
調査担当　重松佳久（現、松山市教育委員会文化財課）
調査補助員　石丸直樹・井上泰三

3．遺跡周辺の環境

伊台惣部遺跡が所在する伊台地区は、松山平野北部、道後温泉や文京遺跡の北にある丘陵部と谷部からなる集落である。集落の中央には、伊台川が東西に流れ、石手川にそそいでいる。

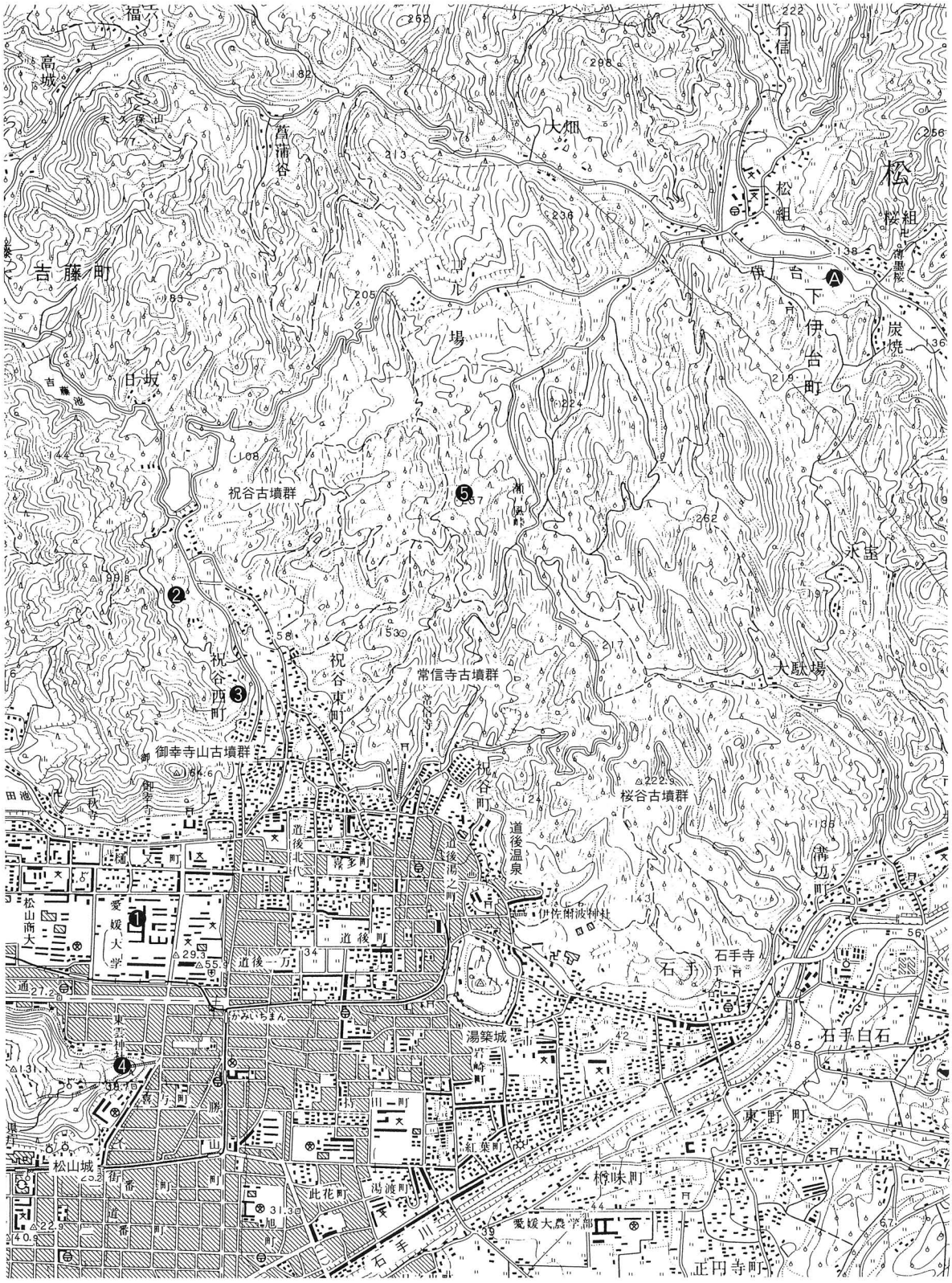
地質は、松山花崗内緑岩が分布し、伊台川下流（伊台東部）の湯山地区では湯ノ山花崗岩となる。

遺跡は、丘陵上に立地する古墳群が幾つかある。特に、道後温泉や文京遺跡のある道後城北地区と接する南の丘陵地帯は、松山平野が一望でき、後期古墳が数多く確認されている。発掘調査例は少ないが、平成７年～９年に調査を実施した瀬戸風峠遺跡では、横穴式石室５基、箱式石棺８基、石蓋土坑墓１基、木棺墓１基が検出されている。このうち、４号墳からは、玄室奥壁沿いに板石で囲いを作り、その内に木炭を敷きつめて、遺体を安置した事例が確認され、全国的に稀少な資料になっている。本資料はレプリカを製作し、松山市考古館で展示している。このほか古墳群からは、馬具、剣、鏃、耳環等多くの副葬品が出土をみている（相原浩二 1998）。

集落遺跡は、本格的な調査がこれまでにはなく、本調査は初例になる。

〔文献〕

相原　浩二　1998『瀬戸風峠遺跡』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松山市教育委員会　1989『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』



Ⓐ伊台惣部遺跡　❶文京遺跡　❷祝谷六丁場遺跡　❸祝谷大地ケ田遺跡　❹東雲神社　❺瀬戸風峠遺跡

第１図　調査地周辺の遺跡分布図（Ｓ＝1：25,000）

Ⅱ　調査の概要

1．地区割り（第４図）

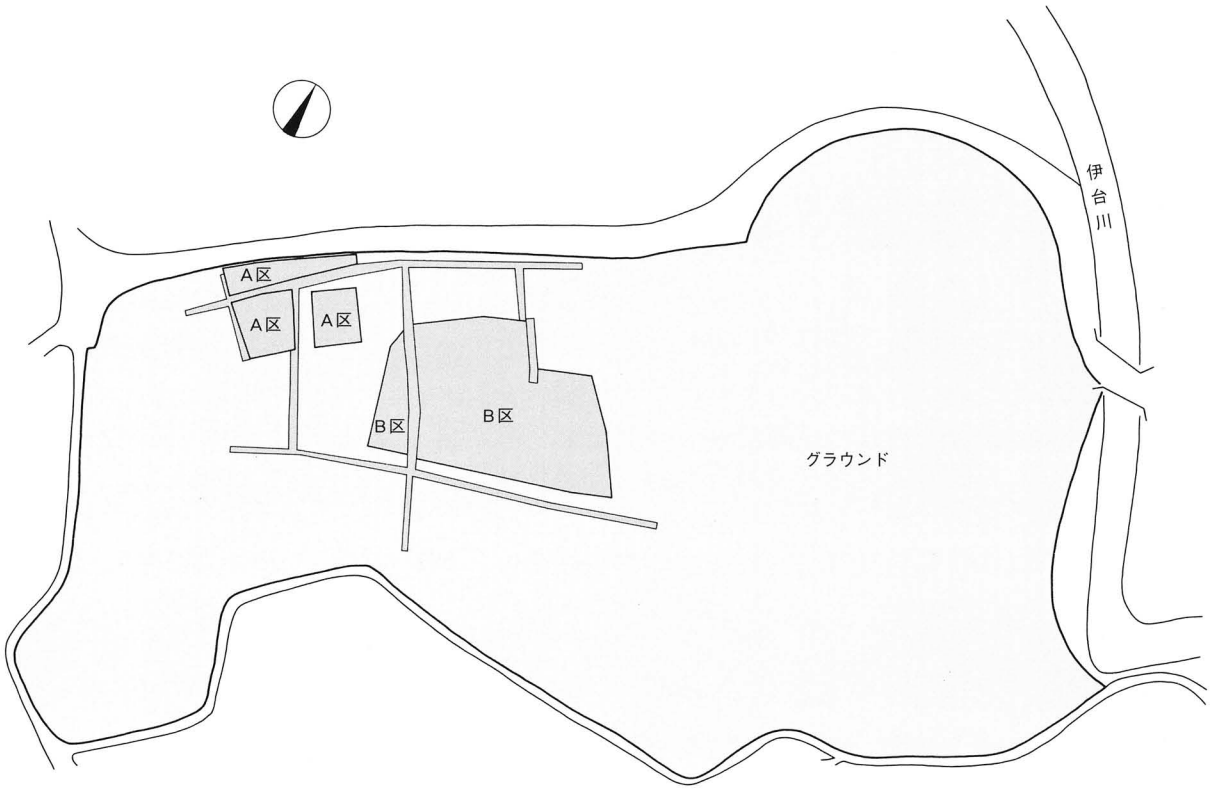
調査は、東西に２区分し、東側をＢ区、西側をＡ区として進めた。また、全体は５ｍ四方にグリッドを設定し、Ａ・Ｂ区の中間地点を基準に、東をＥ１～Ｅ10、西をＷ１～Ｗ７、北をＮ１～Ｎ４、南をＳ１～Ｓ４に細分した。なお、報告はＡ区とＢ区とを分けて記述するが、遺構番号はＡ・Ｂ区関係なく、通し番号を付した。

2．層　位（第３図）

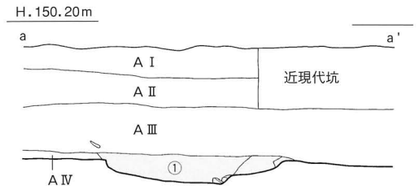
Ａ区では、基本層位はＡⅠ層耕作土、ＡⅡ層黄褐色粘質土、ＡⅢ層暗茶褐色粘質土、ＡⅣ層暗黄茶褐色粘質土になる。遺構は、ＡⅣ層上面で検出作業を行い、土層壁では土坑ＳＫ３がＡⅣ層を切り、ＡⅢ層が覆った状況を示している。

Ｂ区では、ＢⅠ層灰色土（旧水田）、ＢⅡ層暗茶褐色粘質土、ＢⅢ層黒褐色粘質土、ＢⅣ層暗褐色粘質土、ＢⅤ層茶褐色粘質土になり、ＢⅢ層・ＢⅣ層・ＢⅤ層は色調と混入物の差から細分される。遺構は、ＢⅣ層上面で検出作業をする。

Ａ区とＢ区との関係は、概ねＡⅣ層とＢⅤ層とが対応するものと考えられるが、他は確かな対応関係を判断できない。



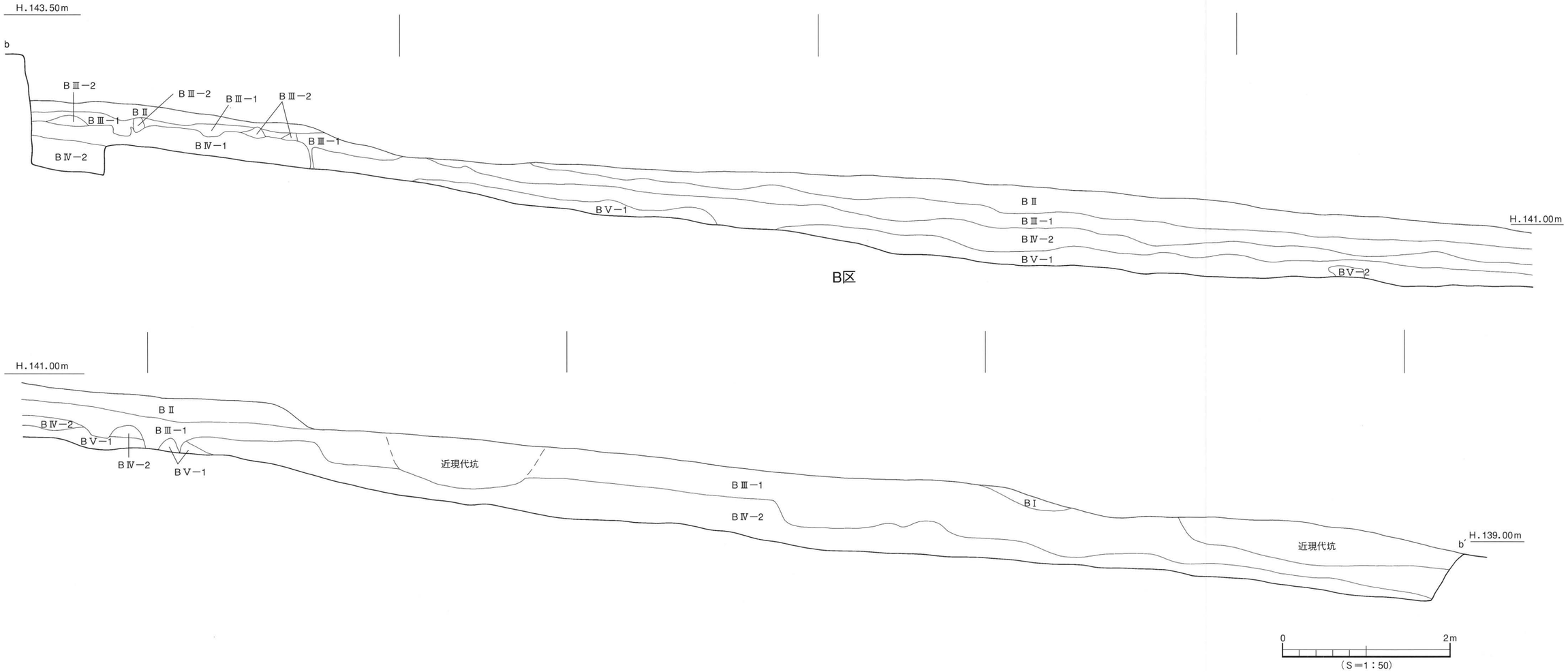
第２図　調査地測量図（Ｓ＝1：1,500）



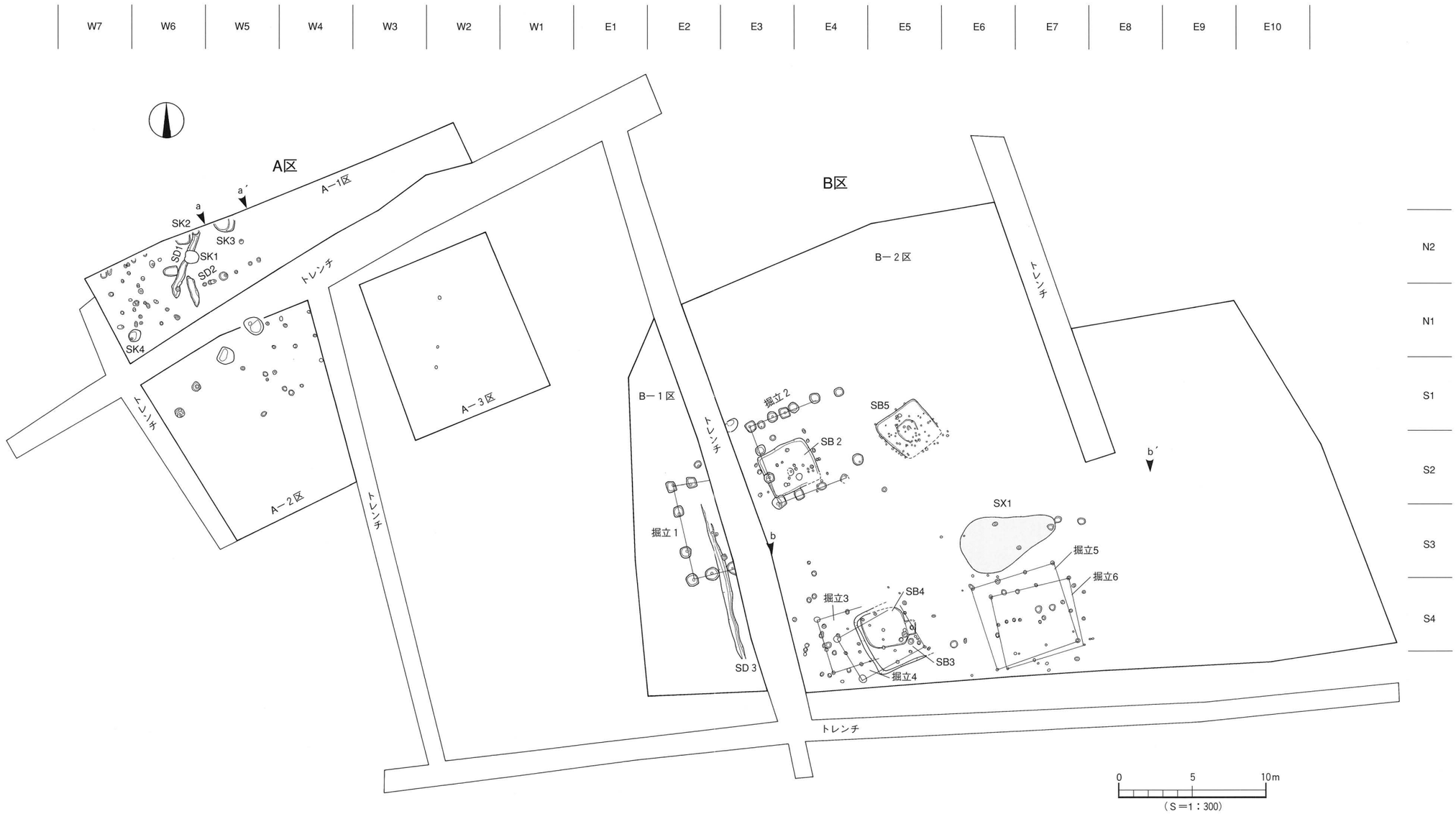
A区

A区土層
- ＡⅠ　耕作土
- ＡⅡ　黄褐色粘質土
- ＡⅢ　暗茶褐色粘質土
- ＡⅣ　暗黄茶褐色粘質土
- ①　黒褐色土(SK３)

B区土層
- ＢⅠ　灰色土（旧水田）
- ＢⅡ　暗茶褐色粘質土
- ＢⅢ－１　黒褐色粘質土（黄褐色ぎみ）
- ＢⅢ－２　黒褐色粘質土
- ＢⅣ－１　暗褐色粘質土
- ＢⅣ－２　暗褐色粘質土（Ⅳ－１より明るい）
- ＢⅤ－１　明茶褐色粘質土
- ＢⅤ－２　暗茶褐色粘質微砂



第３図　Ａ・Ｂ区土層図


W7
W6
W5
W4
W3
W2
W1
E1
E2
E3
E4
E5
E6
E7
E8
E9
E10
N2
N1
S1
S2
S3
S4
A区
A−1区
A−2区
A−3区
B区
B−1区
B−2区
トレンチ
SK1
SK2
SK3
SK4
SD1
SD2
SD3
SB2
SB3
SB4
SB5
SX1
掘立1
掘立2
掘立3
掘立4
掘立5
掘立6
a
a´
b
b´
0
5
10m
（S＝1：300）

第４図　遺構配置図

Ⅲ　遺構と遺物

１．Ａ区の調査（図版２）

Ａ区では、溝２条、土坑４基、柱穴・小穴59基を検出した。時期を特定できるものは、ほとんどない。なお、Ａ区は調査上Ａ－１区～Ａ－３区に地区分けをしている。

ＳＤ１（第４図）

ＳＤ１は、Ａ－１区西、Ｗ６Ｎ２で検出した。ＳＫ１に切られ、大小の柱穴・小穴との切り合いがあるが、その時期的関係は判断しがたい。規模は、検出長4.4m、幅0.5m、深さ７㎝を測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は第６図２で、弥生土器の壺になる。時期は弥生時代後期とする。

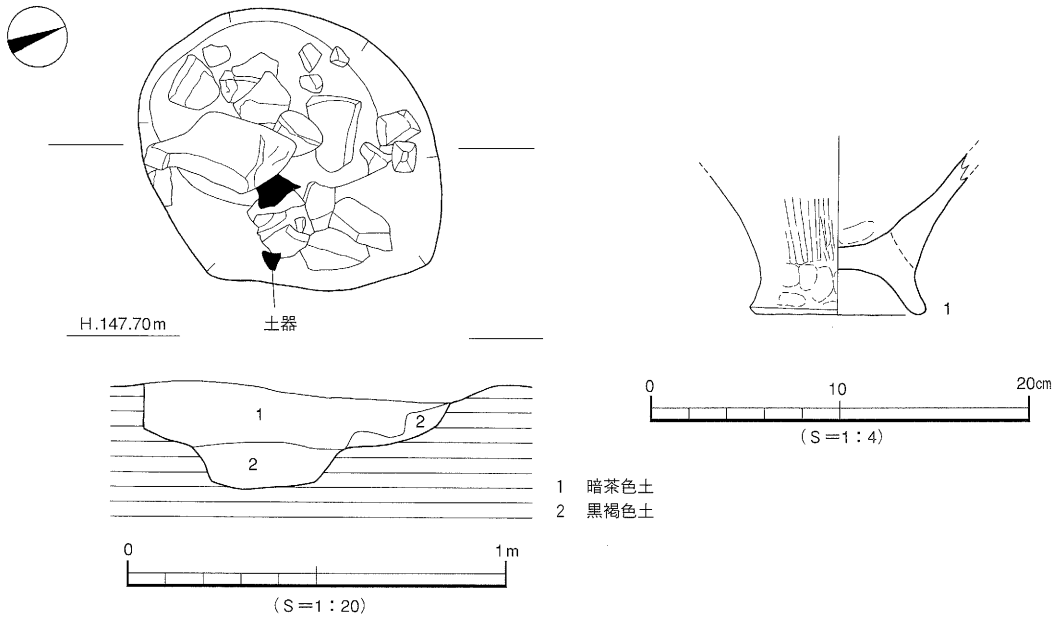
ＳＤ２（第４図）

ＳＤ２は、Ａ－１区西、Ｗ６Ｎ２で検出した。規模は検出長2.2m、幅0.5m、深さ８㎝を測る。断面形状は逆台形状を呈する。遺物は出土していない。時期は特定できない。

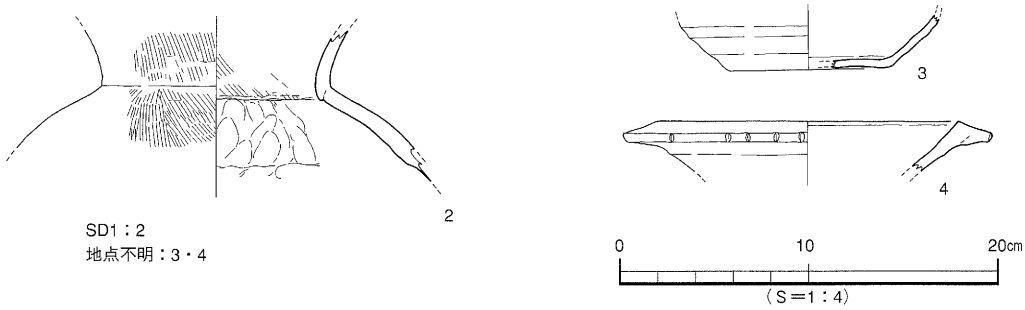
ＳＫ４（第５図、図版２）

ＳＫ４は、Ａ－１区西、Ｗ６Ｎ１で検出した。平面形態は概ね円形で、規模は南北0.8m、東西0.7m、深さ28㎝を測る。構造は二段掘りになる。埋土は上部が暗褐色土、下部が黒褐色土になる。遺物は礫と弥生土器片とが数点出土している。弥生土器は実測可能なものが１点で、第５図１がある。甕の底部片で、くびれの上げ底を呈し、弥生時代中期後葉の特徴を示す。

時期：出土土器が埋没時を表すとすれば、弥生時代中期後葉となる。



第５図　SK４測量図・出土遺物実測図



第６図　Ａ区出土遺物実測図

ＳＫ１（第４図）

ＳＫ１は、Ａ－１区西、Ｗ６Ｎ２で検出し、ＳＤ１を切る。平面形態は概ね円形で、規模は東西0.9m、南北0.8mになる（深さ不明）。出土遺物はない。時期は特定できない。

ＳＫ２（第４図）

ＳＫ２は、Ａ－１区西、Ｗ６Ｎ２で検出し、調査区外におよぶ。平面形態は四角形を呈するものと思われ、規模は東西0.9m、南北検出長0.4m、深さ12cmを測る。出土遺物はない。時期は特定できない。

ＳＫ３（第４図）

ＳＫ３は、Ａ－１区西、Ｗ５Ｎ２で検出し、調査区外におよぶ。ＡⅢ層が遺構を覆っている。平面形態は円形または四角形を呈し、規模は東西1.4m、南北検出長0.8m、深さ26cmを測る。出土遺物はない。時期は特定できない。

Ａ区出土遺物（第６図３・４）

Ａ区では、実測可能な遺物は２点であった。３は近世土師器で、底部はスノコ痕を看取する。４は弥生中期中葉の壺の口縁部である。

２．Ｂ区の調査

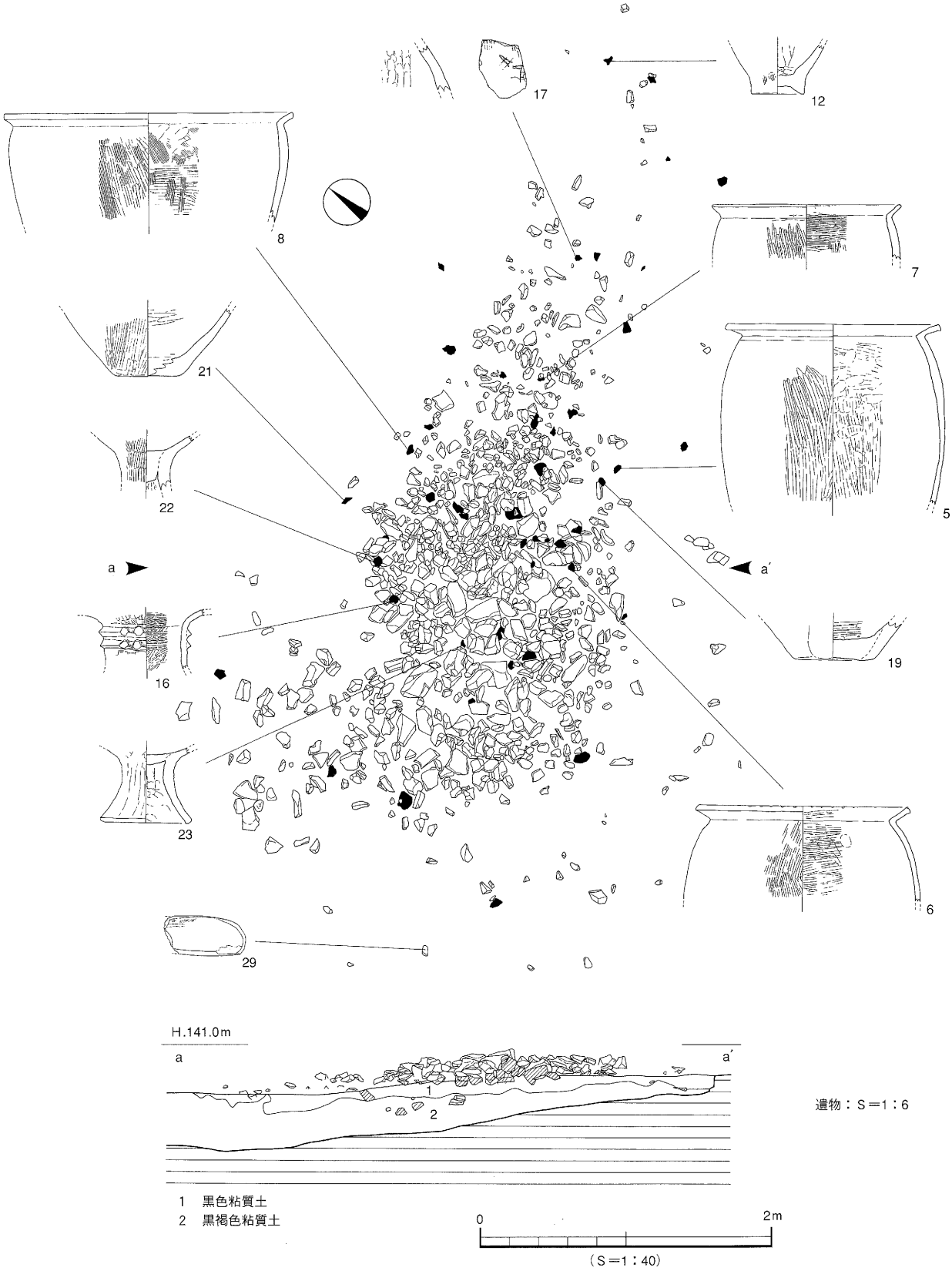
Ｂ区では、竪穴式住居址４棟、掘立柱建物址６棟、溝１条、性格不明遺構１基、柱穴・小穴116基を検出した。Ｂ区は、Ｂ－１区とＢ－２区とに地区分けした。

(1) 弥生時代

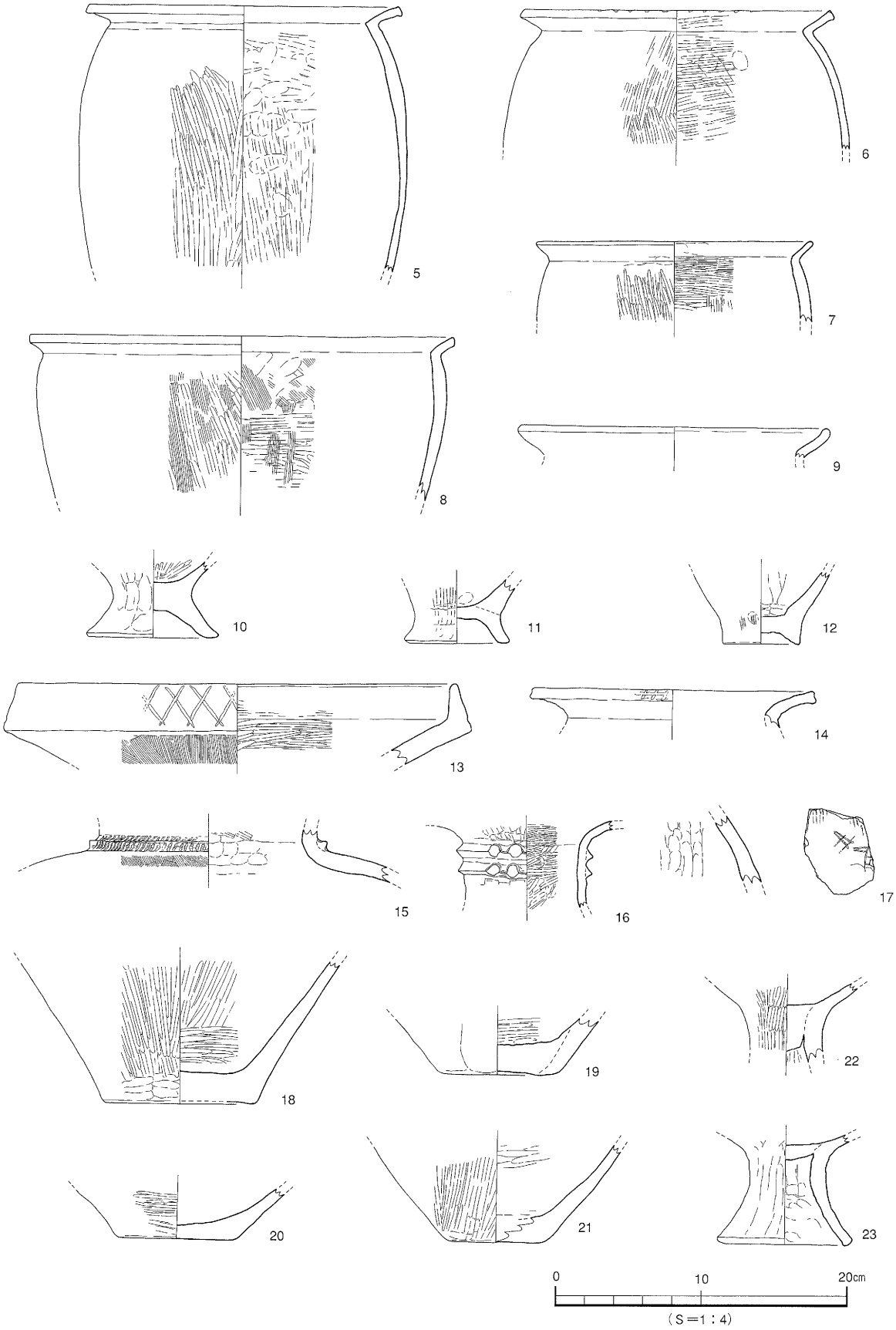
弥生時代と特定できる遺構は、性格不明遺構１基と溝１条である。

ＳＸ１（第７図、図版３）

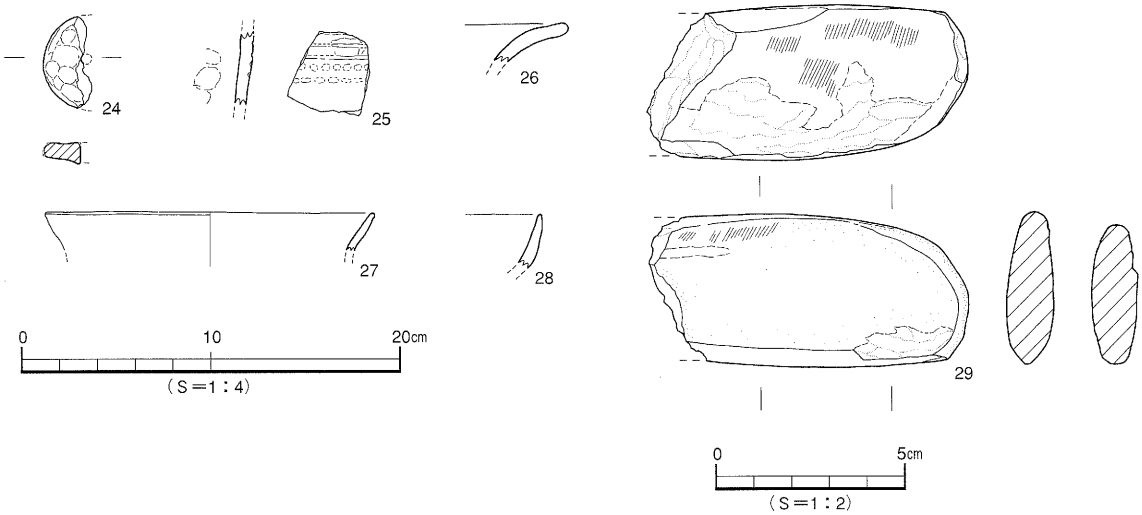
ＳＸ１は、Ｂ－２区中央南、Ｅ６Ｓ３で検出した。掘り方はなく、基本層位ＢⅢ層に対応するかと思われる黒色粘質土上に礫が集中していた。礫の分布は隅丸三角形状を呈し、東西6.8m、南北3.0mの範囲をもつ。礫に混じり弥生土器片が出土している。



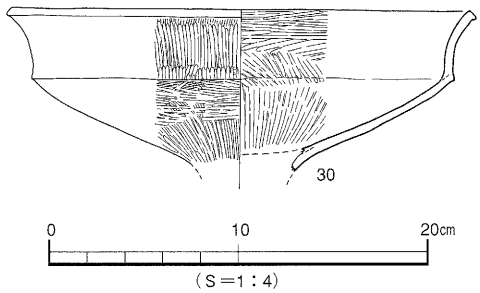
第７図　SX１測量図・遺物出土状況



第8図　SX1出土遺物実測図(1)



第９図　SX１出土遺物実測図(2)



第10図　SD３出土遺物実測図

出土遺物（第８・９図５～29、図版６）

５～12は甕、13～21は壺、22・23は高坏脚部となる。その特徴から弥生時代中期中葉とみられる。このうち、17は壺の胴上半部にシカの線刻がみられる。24は土製紡錘車。25は弥生時代前期後半の甕の胴上半部である。26は鉢か。27・28は古式土師器で27は甕口縁部、28は鉢口縁部。29は石鎌の未製品で、石材は片岩とみられる。

時期：遺物中最も量が多く、破片が大きい土器から、弥生時代中期中葉とする。

ＳＤ３（第10図、図版６）

ＳＤ３は、Ｂ－１区南、Ｅ２Ｓ３～Ｅ２Ｓ４で検出し、掘立１に切られている。規模は、検出長10.9m、幅0.6m、深さ12cmを測る。断面形状は逆台形状を呈す。遺物は、高坏の坏部１点がふせられた状況で出土し、その他土器片が少量ある。第10図30は高坏坏部で、口縁部がゆるやかに開き、弥生時代後期中葉～後葉に比定される。

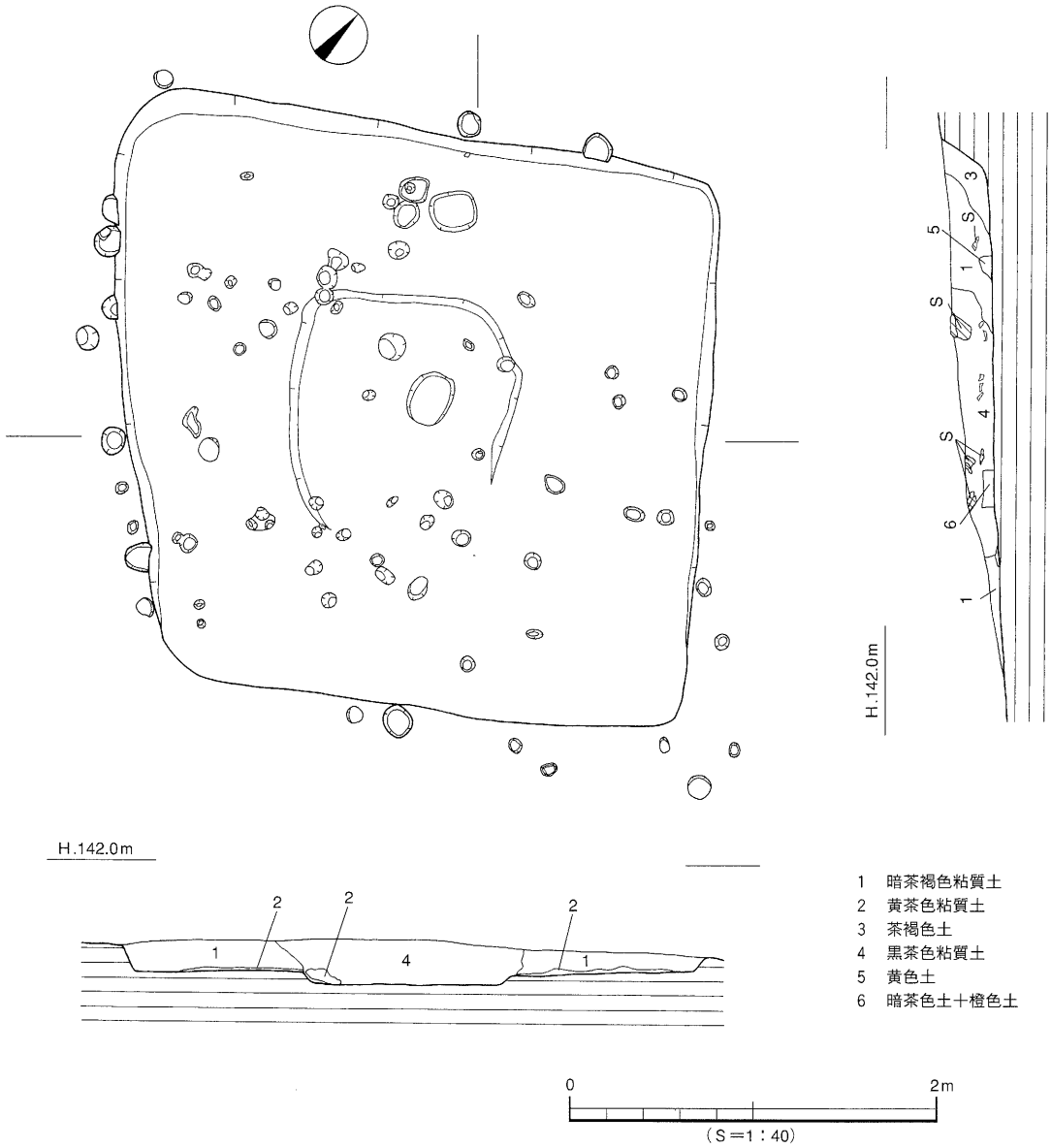
時期：高坏坏部はほぼ完形品より、ＳＤ３の廃絶に近い時期を示すものとみてよく、弥生時代後期中～後葉とする。

(2) 古墳時代～古代

古墳時代～古代と特定できる遺構は、竪穴式住居址３棟である。

ＳＢ５（第11・12図、図版３・４）

ＳＢ５は、Ｂ－２区中央西、Ｅ３Ｓ２で検出した。平面形態は方形で、規模は東西3.3m、南北3.1m、深さ25cm、床面積10.2m²を測る。中央部では、１辺1.2～1.3m四方で、約10cm凹む。炭化材が放射状に検出され、屋根材が落下した様相を呈している。炭化材は分析の結果、ガマズミ属、コナラ属アカガシ亜属、ヤブツバキ、トネリコ属、広葉樹、ヤブニッケイ、クマシデ属イヌシデ節、シャシャンボ、サクラ属？と判明した。埋土は、中央の凹地には黒茶色粘質土(4)があり、北側には茶褐色土(3)、床面には部分的に黄茶色粘質土(2)や黄色土(5)、暗茶色土と橙色土との混合土(6)がみられ、埋土の多くは暗茶褐色粘質土となる。遺物は、中央部の凹みの外で、床付近に完形品や大型破片が12個体分出土した。

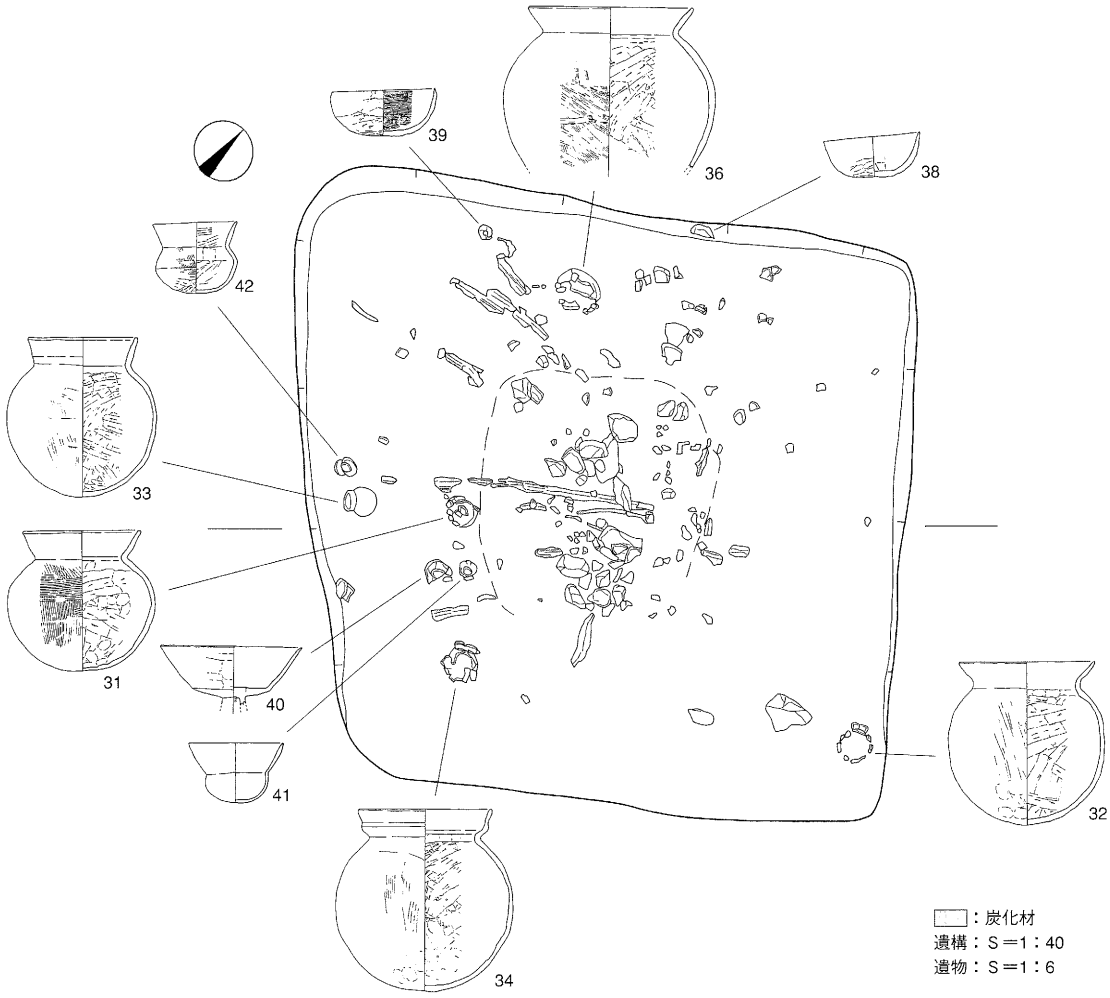


第11図　SB５測量図

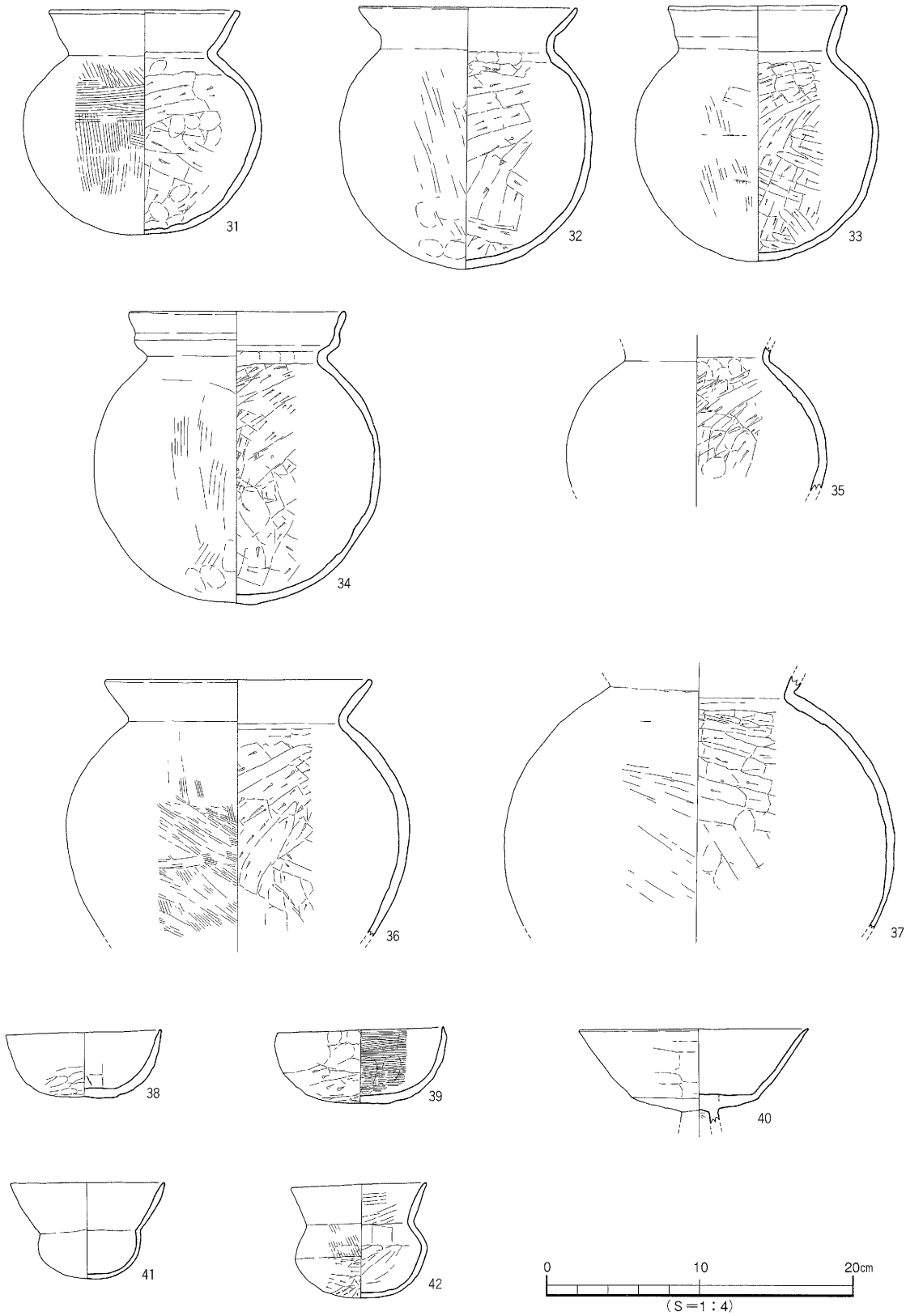
出土遺物（第13図31～42、図版６・７）

31～37は甕で、31～35は小型品、36・37は中型品になる。口縁部は31・32が内湾、33・36が直線的、34は二重口縁状に立ち上がる。外面はタテ方向の刷毛目で、上半部にヨコ方向の刷毛目がみられるもの（31・33）がある。内面はケズリとなる。38・39は直口口縁の鉢で、口縁端部は尖る。外面下半はケズリ、内面は刷毛目調整となる。40は高坏で、坏部は逆台形状を呈し、口縁端部はわずかに外に開く。41・42は丸底土器で、41は口径が胴部最大径よりも広く、42は口径値と胴部最大径値がほぼ同じになる。

時期：出土土器の特徴から古墳時代前期後半。



第12図　SB５遺物出土状況



第13図　SB 5 出土遺物実測図

ＳＢ２（第14図、図版４）

ＳＢ２は、Ｂ－２区西半部、Ｅ３Ｓ２で検出し、掘立２に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は東西3.6m、南北3.2m、深さ20cm、床面積11.5m²を測る。床面には穴が幾つかあるが、主柱穴の認定が出来ない。埋土は暗褐色粘質土で、遺物は大型破片が住居内東側で集中して出土する。実測可能な土器は４点である。

出土遺物（第14図43～46、図版８）

43は土師器のコシキである。三角形状で、断面が平らで、薄い把手をもつ。底部は丸みをもち、焼成前穿孔の一部が遺存する。44～46は須恵器の高坏で、坏部は逆台形状、坏底部と口縁部との境には稜および凹線をもつ。脚部は裾部が水平に開き、端部が44は厚く丸みをもち、46は立ち上がる。

時期：出土土器より７世紀とする。

ＳＢ３（第15図、図版３）

ＳＢ３は、Ｂ－２区南、Ｅ４・Ｅ５～Ｓ４で検出し、掘立３・４とＳＢ４と重複する。いずれも切り合い関係は判断できていない。平面形態は方形で、東西4.5m、南北検出長3.3m、深さ20cm、検出床面積14.8m²を測る。床面には穴があるが、本住居址に伴うかは不明であり、主柱穴の判断もできない。施設には周辺溝があり、最大で約30cmの幅をもち、埋土は暗茶褐色土(3)となる。住居全体の埋土は暗茶褐色土に黄色土がブロック状(2)に混入するもので、実測可能な遺物はない。

時期：住居の形状と規模から５～７世紀とする。

(3) 時期不特定遺構

時期が特定できない遺構には、竪穴式住居１棟、掘立柱建物６棟がある。

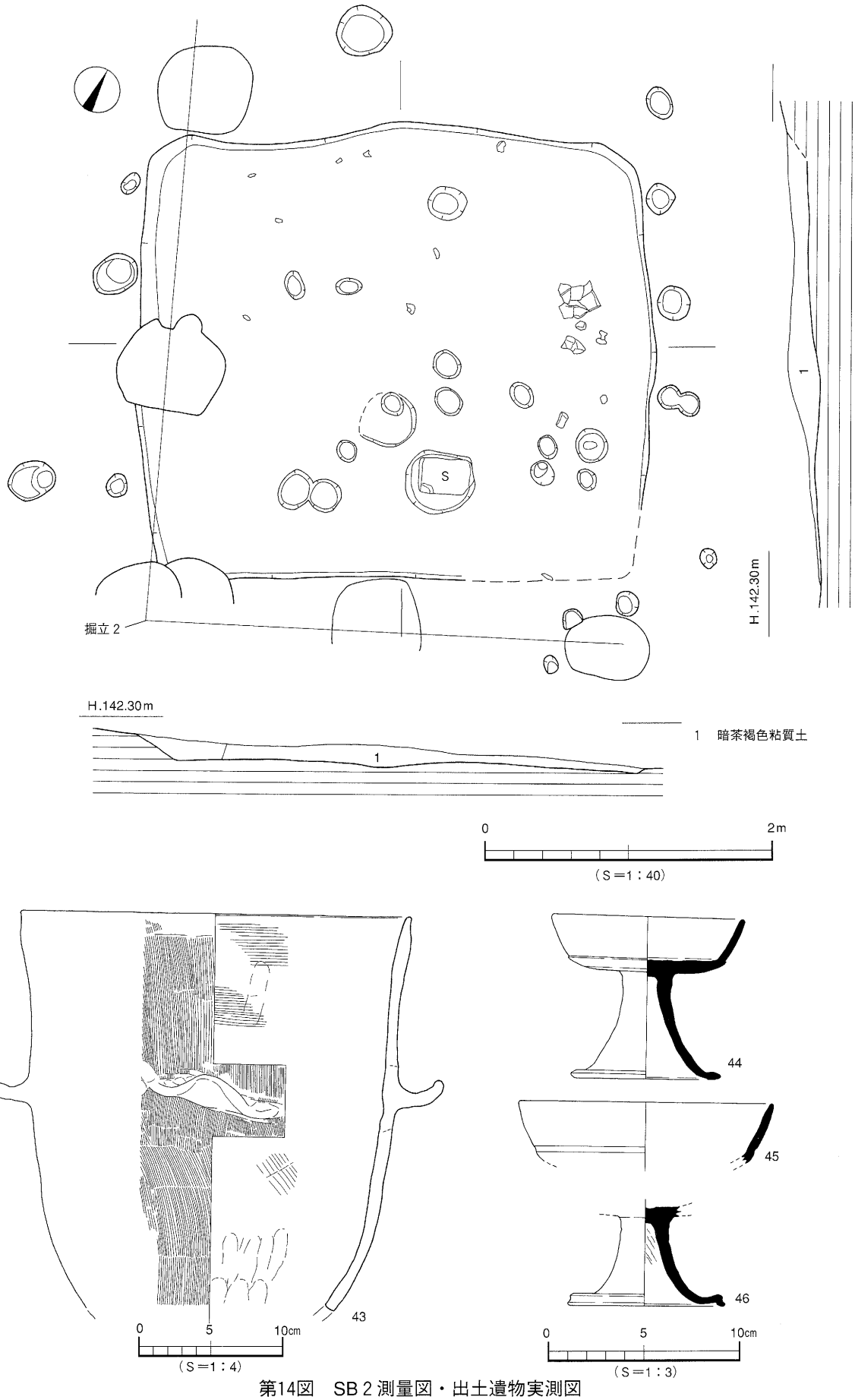
ＳＢ４（第15図、図版３）

ＳＢ４は、Ｂ－２区南、Ｅ４・Ｅ５～Ｓ４で検出され、ＳＢ３と掘立３・４と重複する。この切り合い関係は判断されていない。平面形態は方形で、東西2.95m、南北長2.60m、深さ10cm、検出床面積7.6m²を測る。東側に南北1.2m、東西0.4mの長方形の張り出し部をもつ。床面上の穴は本住居址に伴うものかは判断できていない。主柱穴も特定出来ない。埋土は暗灰色土(1)で、礫が数点ある。遺物には実測可能なものはない。

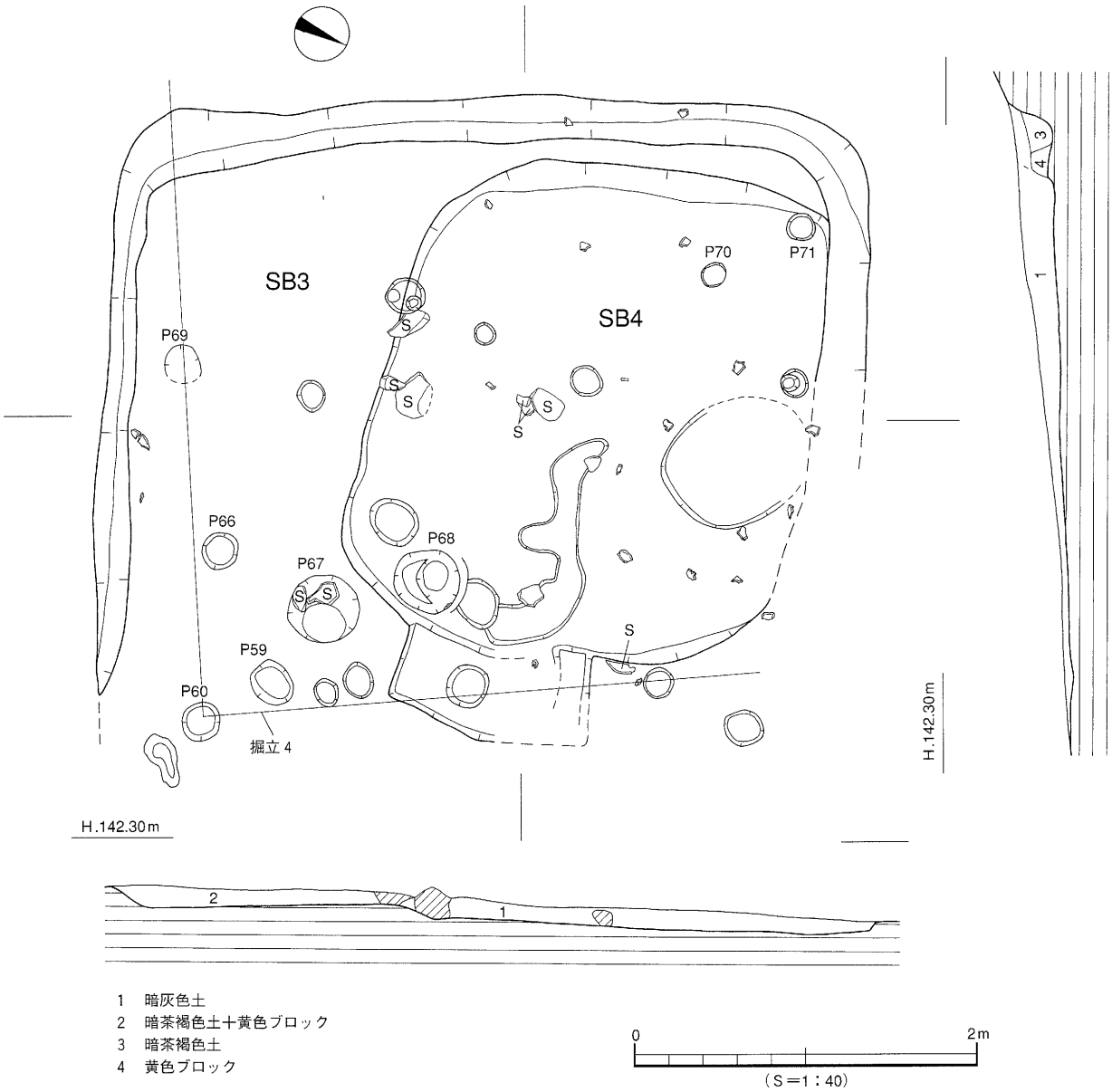
時期：平面形態と張り出しを持つことより、弥生時代後期から古墳時代までの時期比定になる。

掘立１（第16図、図版５・８・９）

掘立１は、Ｂ－１区中央、Ｅ２Ｓ３で検出し、ＳＤ３を切る。東側柱穴列は試掘トレンチで消失している。規模は３間×２間分を確認し、桁行6.6m、梁行検出長2.8m、検出床面積18.4m²を測る。桁行の柱間寸法は両側が狭く1.7mと2.1m、中央が2.7mになり、梁行は1.3mと1.5mになる。柱穴は、平面形態に円形と方形の二種がある。規模は、短辺・短径では52～84cm、長辺・長径では68～95cm、深さ16～39cmを測る。柱痕は全ての柱穴で確認し、直径８～18cm、深さ５～13cm（柱掘り方の床面から）を測る。柱掘り方内の埋土は暗茶褐色土(1)が主体で、茶褐色粘質土(3)や明白灰色の微砂と粘質土の混合土(4)もあり、主痕部分は黒褐色粘質土(2)になる。



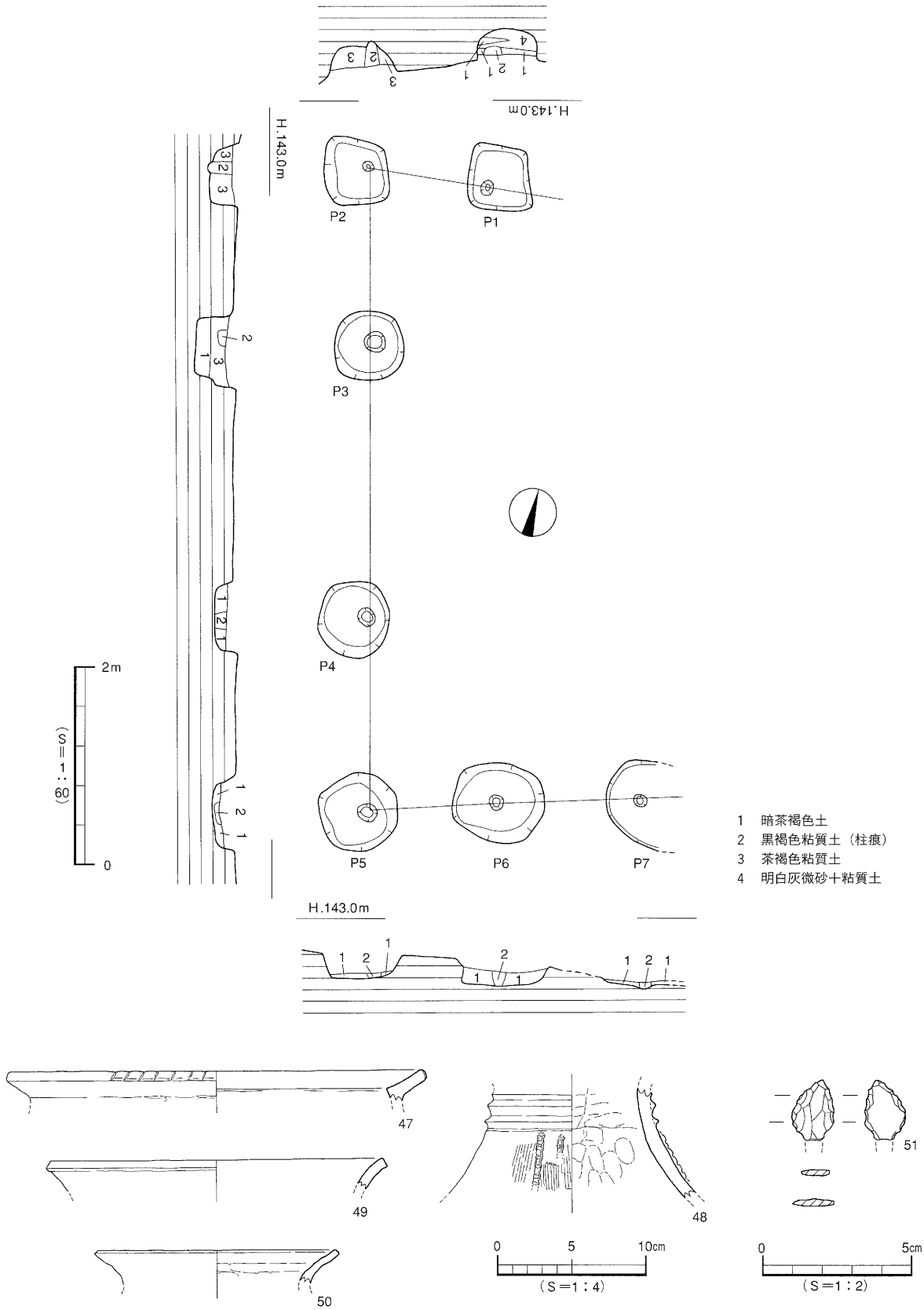
第14図　SB 2 測量図・出土遺物実測図



第15図　SB 3・4 測量図

遺物は、幾つかの柱穴から土器や石器の小片が出土している。47～49は弥生土器で、47・49は甕、48は壺。50は古式土師器の甕。51は石鏃で、石材はサヌカイトである。

時期：古式土師器以降、すなわち古墳時代中期以降で、下限は判断できない。



第16図　掘立１測量図・出土遺物実測図

掘立２（第４図、図版４）

掘立２は、Ｂ－２区西、Ｅ３Ｓ２で検出し、ＳＢ２を切る。東側は未検出となる。規模は３間×３間分を確認し、桁行6.6m、梁行4.9m、床面積26.9㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.7～1.9m、梁行は1.5～1.7mになる。柱穴は、平面形態が概ね隅丸方形になり、規模は短辺44～65㎝、長辺55～80㎝、深さ９～48㎝を測る。柱痕は５基の柱穴から検出されている。遺物は実測可能なものがない。

時期：ＳＢ２が７世紀であり、それを切るので７世紀以降となり、下限は判断できない。

掘立３（第４図）

掘立３は、Ｂ－２区南、Ｅ４Ｓ４で検出した。ＳＢ３・４、掘立４と重複するが、柱穴の切り合い関係はない。規模は２間×２間以上になり、東側が未検出になる。桁行は3.6mで柱穴間が1.7mと1.9m、梁行検出長は2.0m、検出床面積7.2㎡を測る。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は短径22～40㎝、長径25～38㎝、深さ10～36㎝を測る。柱痕は明確でない。出土遺物はない。

時期：出土物と切り合い関係がなく、時期特定が出来ない。

掘立４（第４図）

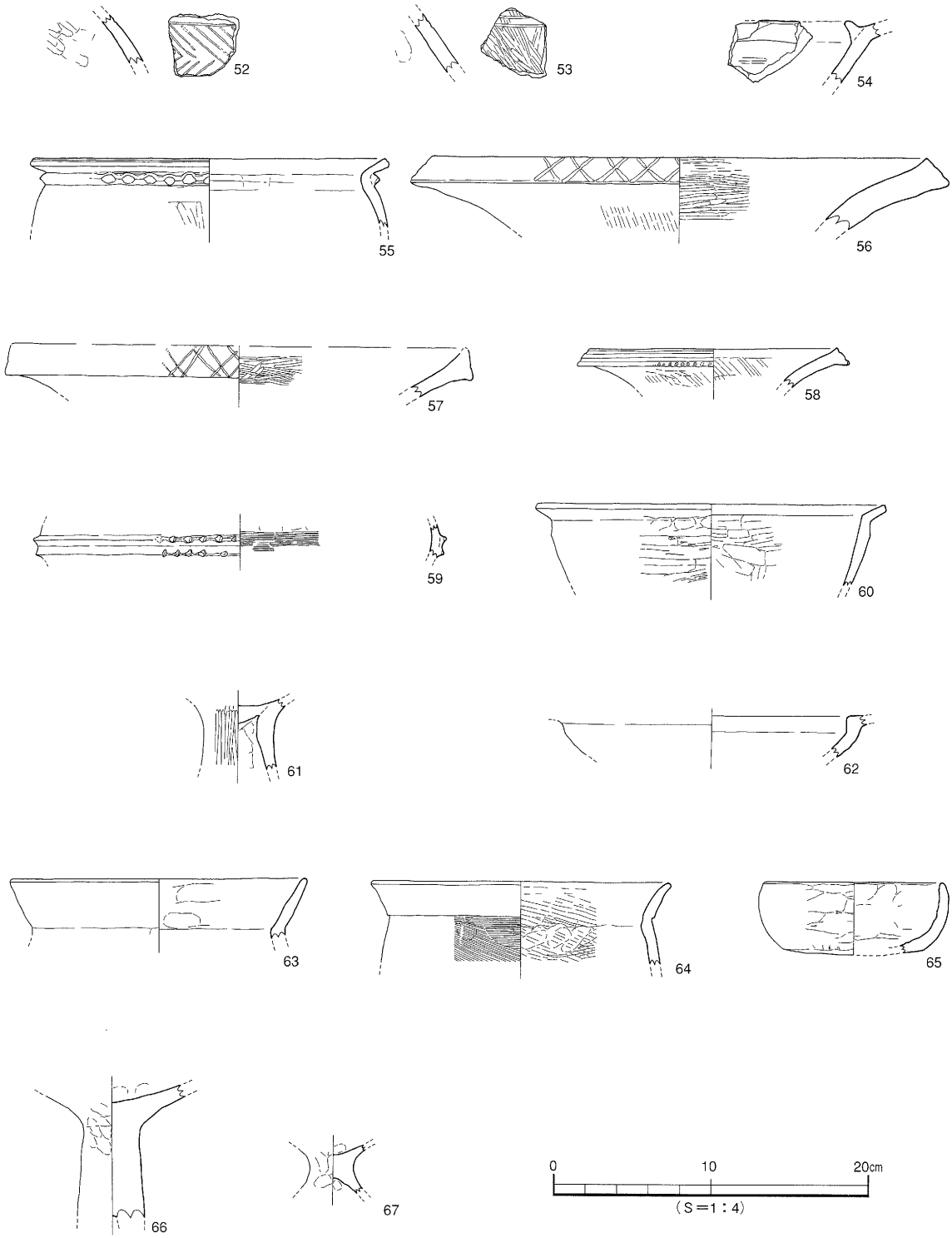
掘立４は、Ｂ－２区南、Ｅ４Ｓ４で検出した。ＳＢ３・４、掘立３と重複するが、柱穴の切り合い関係はない。規模は、２間×１間以上となり、東側が未検出になる。桁行検出長は4.6mで、柱間が2.1mと2.5mになる。梁行は3.3m、床面積15㎡を測る。梁行は長過ぎるため、２間の可能性がある。柱穴の平面形態は円形と隅丸方形を呈し、北東隅と南東隅とが大きい規模となる。大きい柱穴は、短径・短辺が52㎝と54㎝、長径・長辺が55㎝と56㎝、深さは10㎝と13㎝。小さい柱穴は短径・短辺が18㎝と22㎝、長径・長辺が20㎝と22㎝、深さは４㎝と８㎝となる。出土遺物は図化できるものがない。

時期：出土物と切り合い関係がなく、時期特定が出来ない。

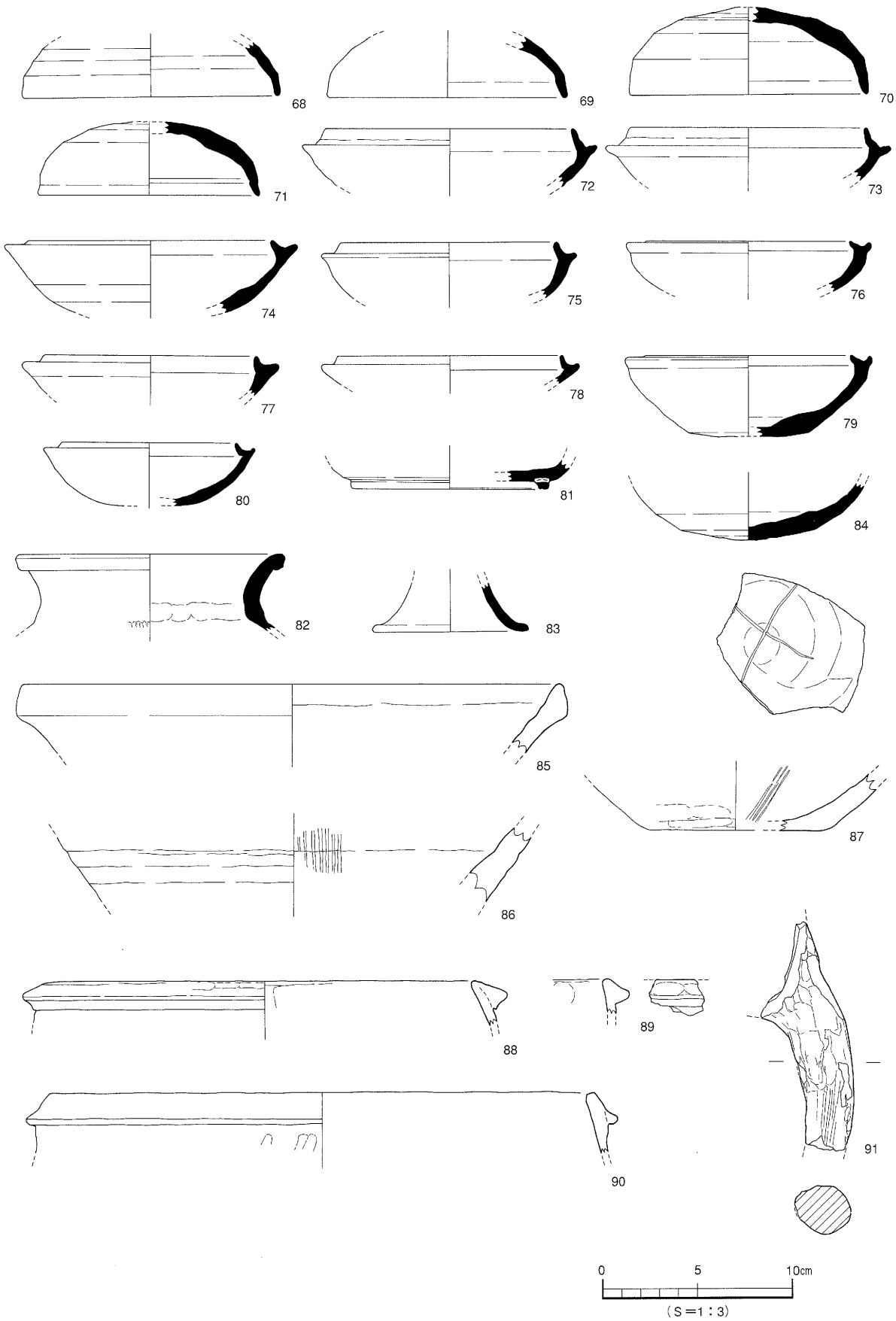
掘立５（第４図、図版５）

掘立５は、Ｂ－２区南、Ｅ６・Ｅ７～Ｓ３・Ｓ４で検出し、掘立６と重複する。建物全体の平面形状は方形になる。検出した柱穴数は、３間×１間分であるが、遺存状況のよい北側柱列を重視すれば、３間×３間であった可能性は高い。規模は東西・南北ともに5.6mとなり、床面積は31.3㎡になる。柱穴間は1.7～2.0mを測る。柱穴の平面形態は円形～楕円形で、規模は短軸20～30㎝、長軸24～50㎝、深さ８～21㎝を測る。柱痕は３基の柱穴で検出されている。遺物は図化できるものがない。

時期：出土物と切り合い関係がなく、時期特定が出来ない。



第17図　B区出土遺物実測図(1)



第18図　B区出土遺物実測図(2)

第19図　B区出土遺物実測図(3)

掘立６（第４図、図版５）

掘立６は、Ｂ－２区南、Ｅ６・Ｅ７～Ｓ３・Ｓ４で検出し、掘立５と重複する。建物全体の平面形状は方形になる。検出した柱穴数は、３間×１間分であるが、遺存状況の良い北側柱列を重視すれば、３間×３間であった可能性が高い。規模は東西5.4m、南北4.9m、床面積26.4m²、柱穴間1.3～1.8mを測る。柱穴の平面形態は円形～隅丸方形を呈し、規模は短径・短辺８～28cm、長径・長辺12～35cm、深さ８～33cmを測る。柱痕は１基の柱穴で検出している。遺物は図化できるものがない。

時期：出土物と切り合い関係がなく、時期特定が出来ない。

(4) Ｂ区出土遺物（第17～19図52～102、図版８・９）

出土層位や出土地点が特定できないが、実測可能な遺物があるので、ここで掲載しておく。

52～62は弥生土器、63～67は古墳時代～古代の土師器、68～84は古墳時代～古代の須恵器、85～91は中世土師器・陶器、92～100は石器、101・102は鉄製品となる。

このうち、92～100の石器では、92・93・94のナイフ形石器が注目され、松山平野では稀少資料として重要になる。

また、101・102の鉄製品は時代が明確にできない。

遺構・遺物観察表一覧

表１　竪穴式住居址一覧　　（　）は検出値

竪穴(SB)	時期	平面形	規模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(m²)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備考
							高床	土坑	炉	カマド		
2	古墳時代	方形	3.6×3.2×0.2	暗茶褐色粘土	11.5							掘立２に切られる
3	古墳時代	方形	4.5×(3.3)×0.2	暗茶褐色＋黄色ブロック	(14.8)							SB4と切り合う
4	弥生後期～古墳時代	方形	2.9×(2.6)×0.1	暗灰色	(7.6)							SB3と切り合う
5	古墳時代	方形	3.3×3.1×0.25	暗茶褐色粘土	10.2				○			焼失家屋

表２　掘立柱建物址一覧　　（　）は検出値

掘立	規模（間）	方向	桁行		梁行		床面積(m²)	時期	備考
			実長（m）	柱間寸法（m）	実長（m）	柱間寸法（m）			
1	3×(2)		6.6	1.75・2.75・2.1	(2.8)	1.3・1.5	(18.4)	古墳中期以降	SD3を切る
2	3×3		5.5	1.7・1.98・1.82	4.9	1.7・1.5・1.7	26.9	７Ｃ以降	SB2を切る
3	2×(2)		3.6	1.7・1.9	(2.0)	2.0	(7.2)		SB3・4・掘立4と切り合う
4	2×1		4.65	2.55・2.1	3.3	3.3	15.3		SB3・4・掘立3と切り合う
5	3×(1)		5.6	1.75・2.0・1.85	5.6	5.6	31.3		掘立6と切り合う
6	3×(1)		5.4	1.8・1.3・2.3	4.9	4.9	26.4		掘立5と切り合う

表3　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (9.2) 残高 8.5	大型品。くびれの上げ底。	ミガキ (一部ナデ)	ミガキ (マメツ)	褐色 褐色	石・長(1～3) ◎	A区 SK4	
2	壺	残高 (7.0)	頸胴部境の内面に接合痕が明瞭に残る。	ハケ	頸ハケ→ナデ 胴ナデ	黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎	A区 SD1	
3	坏	底径 (8.8) 残高 2.9	底部手法はマメツ。スノコ痕。	回転ナデ	回転ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ◎	A区	
4	壺	口径 (16.2) 残高 2.6	口縁外端部に刻目。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	A区	
5	甕	口径 (21.7) 残高 17.3	口縁端部はナデにより面をなす。	口ヨコナデ 胴ミガキ	口ヨコナデ 胴ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
6	甕	口径 (21.6) 残高 9.5	口縁端部はナデにより面をなす。	口ヨコナデ 胴ミガキ	口ミガキ 胴ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SX1	
7	甕	口径 (19.0) 残高 5.5	口縁端部は細り、狭い面をなす。	口ヨコナデ 胴ミガキ	口ヨコナデ 胴ミガキ	暗褐色 淡褐色	石・長(1) 金ウンモ ◎	B区 SX1	
8	甕	口径 (29.2) 器高 11.4	口縁端部はナデにより、幅広い面をなす。	口ヨコナデ 胴ハケ→ミガキ	口ヨコナデ 胴ハケ→ミガキ	淡褐色 褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
9	甕	口径 (21.5) 残高 2.0	口縁端部は丸みをもって、上方にたちあがる。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SX1	
10	甕	底径 (9.3) 残高 5.3	大型品。くびれの上げ底。	ナデ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～4) ◎	B区 SX1	
11	甕	底径 (7.2) 残高 4.4	中型品。くびれの上げ底。	ミガキ	ナデ	褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎	B区 SX1	
12	甕	底径 (5.4) 残高 6.0	中型品。たちあがりをもつ上げ底。	ハケ→ミガキ (マメツ)	ナデ	淡褐色 暗灰褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
13	壺	口径 (29.8) 残高 5.5	口縁端部は上方に立ち上がり、端面にヘラ描斜格子目文。	ハケ	口ナデ 胴ハケ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	6
14	壺	口径 (19.0) 残高 2.5	口縁端部はナデ凹み、刻目をもつ。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SX1	
15	壺	残高 3.4	頸部に断面三角突帯。突帯上下に刻目。	ハケ	ナデ (一部ハケ)	淡黄褐色 淡灰茶色	石・長(1～3) ◎	B区 SX1	6
16	壺	残高 5.8	突帯上に2ケ1組の指頭痕4組（うち1組は1ケ)。	ナデ	ハケ→ミガキ	褐色 褐色	石・長(1) ◎	B区 SX1	6
17	壺	残高 4.4	シカの線刻。	ナデ	ミガキ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SX1	6
18	壺	底径 (10.6) 残高 9.8	大型品。平底。	ミガキ (一部ナデ)	ミガキ (一部ナデ)	茶褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SX1	
19	壺	底径 8.4 残高 4.0	大型品。わずかに凹む。	ナデ	ミガキ	茶褐色 暗灰褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
20	壺	底径 (8.4) 残高 3.6	中型品。平底。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	

出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
21	壺	底径 (7.8) 残高 6.6	中型品。平底。	ミガキ	ナデ (一部ミガキ)	茶褐色 黒褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
22	高坏	残高 5.4	充塡技法。	ミガキ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 SX1	
23	高坏	底径 (8.2) 残高 7.7	充塡技法。脚部無文。	ミガキ	坏ミガキ 脚ナデ (一部シボリ痕)	淡橙褐色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SX1	
24	紡錘車	直径 (4.8)	焼成前穿孔。	ナデ		淡褐色	石・長(1) ◎	B区 SX1	6
25	甕	残高 4.4	ヘラ描沈線2条＋刺突文2段。	マメツ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SX1	
26	甕	残高 2.0	大きく開く、長い口縁部。	マメツ	ハクリ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) ○	B区 SX1	
27	甕	口径 (17.4) 残高 2.0	古式土師器。口縁端部は丸く、わずかに内側に突出。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1) 金ウンモ ◎	B区 SX1	
28	鉢	残高 2.9	古式土師器。直口口縁は端部が細る。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1) ◎	B区 SX1	
30	高坏	口径 24.6 残高 8.3	口縁端部は面をなす。充塡部分は欠落。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	黄褐色 黄褐色	砂粒 ◎	B区 SD3	6
31	甕	口径 (11.8) 器高 14.6	口縁端部は面をなし、内側に小さく突出。	口ヨコナデ 脚ハケ 底ナデ	口ヨコナデ 脚ハケ 底ナデ	黄灰褐色 灰茶褐色	石・長(1～4) ◎	B区 SB5	6
32	甕	口径 (14.2) 器高 17.1	口縁部は内湾してたちあがり、端部は丸い。	口ヨコナデ 脚ナデ(工具痕) 底ナデ	口ヨコナデ 脚ケズリ (一部ナデ)	明褐色 暗褐色	石・長(1～3) 金ウンモ ◎	B区 SB5	7
33	甕	口径 11.2 器高 16.6	口縁部はわずかに内湾して、たちあがる。	口ヨコナデ 脚ハケ→ナデ	口ヨコナデ 脚ケズリ	淡黄橙色 淡黄褐色	石・長(1～4) ◎	B区 SB5	7
34	甕	口径 (14.4) 器高 18.9	口縁部は複合口縁状になる。端部は丸い。	口ヨコナデ 脚ナデ	口ヨコナデ 脚ケズリ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3) 金ウンモ ◎	B区 SB5 煤付着	7
35	甕	残高 9.3	小型品	ナデ	ケズリ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～4) ◎	B区 SB5	
36	甕	口径 (17.0) 残高 17.7	口縁部はわずかに内湾して、たちあがる。	口ヨコナデ 脚ハケ	口ヨコナデ 脚ケズリ	淡黄褐色 黄褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SB5	
37	甕	残高 16.3	中型品。	ナデ(工具痕)	ケズリ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SB5 煤付着	
38	鉢	口径 10.1 器高 4.5	直口口縁部。口縁端部は細く尖る。	口ヨコナデ 脚ナデ	ヨコナデ (一部工具痕)	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SB5	7
39	鉢	口径 (10.8) 器高 5.1	口縁外面はナデにより、わずかに平坦部をもつ。端部は尖る。	口ナデ 脚ケズリ	ハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～3) ◎	B区 SB5	7
40	高坏	口径 15.0 器高 6.0	口縁部はわずかに外反し、端部は尖る。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色 灰褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SB5	7
41	小型 丸底壺	口径 (9.9) 器高 6.3	内湾してたちあがる口縁部。端部は細く尖る。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) ○	B区 SB5	7

出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
42	小型丸底壺	口径 (8.7) 器高 7.6	口縁端部はわずかに外反し、細く尖る。	口ヨコナデ 胴上ハケ 胴下ケズリ	口ハケ→ヨコナデ 胴ナデ	淡黄褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SB5	7
43	こしき	口径 (27.2) 器高 27.3	三角形状で、扁平な把手は、上方に屈曲する。	ハケ	ハケ (一部ナデ)	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 SB2	8
44	高坏	口径 (9.8) 器高 8.4 底径 7.3	坏部は段をもち、裾部は水平で、端部は尖る。	口・脚回転ナデ 坏底回底ヘラケズリ →回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 SB2	8
45	高坏	口径 (13.0) 残高 3.1	坏部に凹線をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 金ウンモ ◎	B区 SB2	
46	高坏	底径 (8.0) 残高 5.1	裾部は水平に開き、端部はたちあがる。	回転ナデ	脚上シボリ痕 脚下回転ナデ	白灰色 白灰色	密 金ウンモ ◎	B区 SB2	
47	甕	口径 (28.1) 残高 2.1	大型品。端部は丸く、刻目をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 掘立1 P2	
48	壺	残高 7.5	突帯3条以上。棒状突帯は2ケ一組で刻目をもつ。	ハケ	ナデ	暗褐色 黒茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 掘立1 P6	8
49	甕	口径 (22.2) 残高 2.1	口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 掘立1	
50	甕	口径 (15.8) 残高 2.3	古式土師器。わずかに内湾してたちあがる口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～2) ◎	B区 掘立1	
52	壺	残高 3.0	中型品。ヘラ描羽状文。	ミガキ	ナデ	淡褐色 暗灰色	石・長(1) ◎	B区 包含層	8
53	壺	残高 4.3	中型品。ヘラ描沈線2条。	ミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
54	壺	残高 3.9	中型品。内面突帯1条。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 灰茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
55	甕	口径 (22.6) 残高 4.4	頸部に押圧の突帯。	ナデ (一部ミガキ)	マメツ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	B区 包含層	
56	壺	口径 (31.4) 残高 4.4	口縁端面にヘラ描斜格子目文。	口端ヨコナデ 頸ハケ→ナデ	ミガキ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	B区 包含層	
57	壺	口径 (29.8) 残高 3.1	口縁端面にヘラ描斜格子目文。	口端ヨコナデ 頸ナデ	ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金ウンモ ◎	B区 包含層	
58	壺	口径 (15.7) 残高 2.4	口縁端面に凹線文。口縁端部に刻目文。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
59	壺	残高 2.1	胴中位に「M」字突帯。突帯上に刻目文。	ヨコナデ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎	B区 包含層	
60	鉢	口径 (22.2) 残高 5.0	口縁端部はあいまいな面をなす。	口ヨコナデ 胴板ナデ状	口ヨコナデ 胴ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金ウンモ ◎	B区 包含層	
61	高坏	残高 4.2	充填技法。	ミガキ	坏ナデ 脚ナデ(工具)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
62	高坏	残高 2.7	口縁端部欠落。	マメツ	マメツ	淡褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	

出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	甕	口径 (18.8) 残高 3.7	口縁端部は内湾してたちあがる。口縁端部は丸みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 包含層	
64	甕	口径 (19.0) 残高 5.1	口縁端部は丸みをもつ。	口ヨコナデ 胴ハケ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	8
65	鉢	口径 (11.2) 器高 4.8	口縁部は内湾する。口縁端部は丸くなる。	板ナデ状	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～3) ◎	B区 包含層	
66	高坏	残高 8.2	柱部は中実。	マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
67	高坏	残高 3.1	小型品。柱部は中実。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
68	坏蓋	口径 (13.2) 残高 2.8	ケズリとナデにより、丸みのある段をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	B区 包含層	
69	坏蓋	口径 (12.3) 残高 3.1	口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	B区 包含層	
70	坏蓋	口径 (12.3) 器高 4.5	口縁端部は細り、丸くおさめる。	口回転ナデ 天回転ヘラケズリ	口回転ナデ 天ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
71	坏蓋	口径 (11.5) 残高 3.8	口縁端部はわずかに外反する。	口回転ナデ 天回転ヘラケズリ	口回転ナデ 天ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
72	坏身	口径 (12.8) 残高 3.0	たちあがりは端部が細く尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
73	坏身	口径 (12.2) 残高 2.7	たちあがりは端部がわずかに外反し、細く尖る。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ →回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 金ウンモ ◎	B区 包含層	
74	坏身	口径 (12.6) 残高 3.8	たちあがりは短く、端部は尖る。	口マメツ 底回転ヘラケズリ	マメツ	乳灰色 乳灰色	密 △	B区 包含層	
75	坏身	口径 (11.2) 残高 2.9	たちあがりは、端部が丸みをもって尖る。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 白灰色	密 ○	B区 包含層	
76	坏身	口径 (10.7) 残高 2.6	たちあがりは湾曲し、短くたちあがる。	口回転ナデ 底回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
77	坏身	口径 (11.0) 残高 2.1	たちあがりは短く、端部が丸みをもって尖る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
78	坏身	口径 (11.7) 残高 1.5	たちあがりは端部が細く尖る。器壁が薄い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
79	坏身	口径 (10.7) 器高 4.2	たちあがりは短く、端部は尖る。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
80	坏身	口径 (9.2) 残高 3.2	たちあがりは短く、端部は尖る。	口回転ナデ 底マメツ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	B区 包含層	
81	高台坏	口径 (10.2) 残高 1.5	低い高台をもつ。	底回転ナデ 台回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
82	壺	口径 (13.8) 残高 4.0	端部は面をなし、下方が丸みをもつ。	口回転ナデ 口下タタキ	口回転ナデ 胴ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	

出土遺物観察表　土製品　(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
83	高坏	底径 (8.0) 残高 2.5	裾部は短く、水平に開く。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
84	坏身	残高 2.9	「×」の線刻。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	8
85	こね鉢	口径 (28.0) 残高 3.5	口縁端部は上方にたちあがり、端部は広い面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
86	すり鉢	残高 3.8	スリ目の一部を看取。	回転ナデ	マメツ	灰色 青灰色	密 ◎	B区 包含層	
87	すり鉢	底径 (9.6) 残高 2.9	スリ目の一部を看取。	ナデ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) ◎	B区 包含層	
88	鍋	口径 (22.8) 残高 2.3	断面三角形の口縁部。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金ウンモ ◎	B区 包含層 煤付着	
89	鍋	残高 1.7	断面三角形の口縁部。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 淡褐色	石・長(1) ウンモ ◎	B区 包含層	
90	鍋	口径 (28.6) 残高 3.2	口縁直下に断面三角形の粘土帯。	ヨコナデ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	B区 表採	
91	鍋	残高 12.0	三足鍋の脚部片。	ナデ		褐色	石・長(1～3)	B区 包含層	

表4　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
29	石鏃	1/3	片岩	8.5	4.0	1.3	74.8	B区SX1	6
51	打製石鏃	2/3	サヌカイト	2.0	1.4	0.3	0.8	B区掘立1・P4	
92	ナイフ形石器	完形	サヌカイト	6.8	1.6	1.3	14.2	トレンテ	9
93	ナイフ形石器	完形	赤色珪質岩	6.0	1.8	1.1	13.8	B区表採	9
94	ナイフ形石器	完形	赤色珪質岩	5.0	3.0	1.1	14.9	B区表採	9
95	細石核		黒色チャート	4.1	1.4	0.8	5.1	B区包含層	9
96	スクレイパー		サヌカイト	2.3	3.3	0.4	3.0	B区包含層	9
97	スクレイパー		サヌカイト	3.1	2.8	5.5	4.3	B区包含層	9
98	石鏃	2/3	サヌカイト	1.9	2.3	0.2	1.3	B区	9
99	剥片		赤色珪質岩	2.7	2.8	0.9	5.4	B区包含層	9
100	剥片		サヌカイト	3.2	1.7	0.4	2.3	B区包含層	9

表5　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
101	鉄片		6.2	2.9	0.6	16.0	切断途中 B区包含層	9
102	馬具		7.5	4.2	0.8	24.8	B区包含層	9

第２章　関太郎氏採取資料

１．はじめに

(1) 経　緯

平成12年、広島県在住の関太郎氏が道後地区で採取した考古資料を、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターは提供を受けた(以下、「関資料」と呼ぶ)。関氏は少年時代、道後に住まい、植物に関心を持ち、道後一帯の山々を植物採取していた。その折、土器を採取し、興味を覚え、植物採取をするかたわら考古資料も採取するようになった。その後、広島大学に進学し、研究者の道に進まれ、広島大学名誉教授の称号を得られている。この間、採取した考古資料は、ご両親が道後の自宅に保管されていた。

平成11年、関氏と梅木が広島県立みよし風土記の丘資料館の韓国研修旅行（主催は友の会）で知り合い、本資料の事が話題になり、譲渡の依頼を受けた。

平成12～13年、本資料の引き渡しや、資料化についての打ち合わせ等で、関氏には来松いただき、現地見学や名本氏との再会（49年ぶり）を経て、採取地点の確認をしていただいた。名本二六雄氏からは、名本氏と関氏とが少年時代に知人であり、関資料のなかには名本氏と関氏とが一緒に採取したものも含まれていることを知るに至った。

このような経過をもって、今回採取品の資料提示になるのである。

(2) 整理と報告について

採取地点は、概ね５ヶ所である。採取品は土器・瓦・鉄器・人骨・植物種子で、その量はコンテナ４箱分におよんだ。採取品は紙につつまれて、木製のリンゴ箱に入っていた。つつみ紙は一部破損していたが、ひとつつみごとに運んだ。

その後は当センターにて、洗浄や接合（復元含）をして、関氏と名本氏とに立ち会っていただき、出土地点を確認した。その中から、時期が特定できる部位全てを実測をしている。

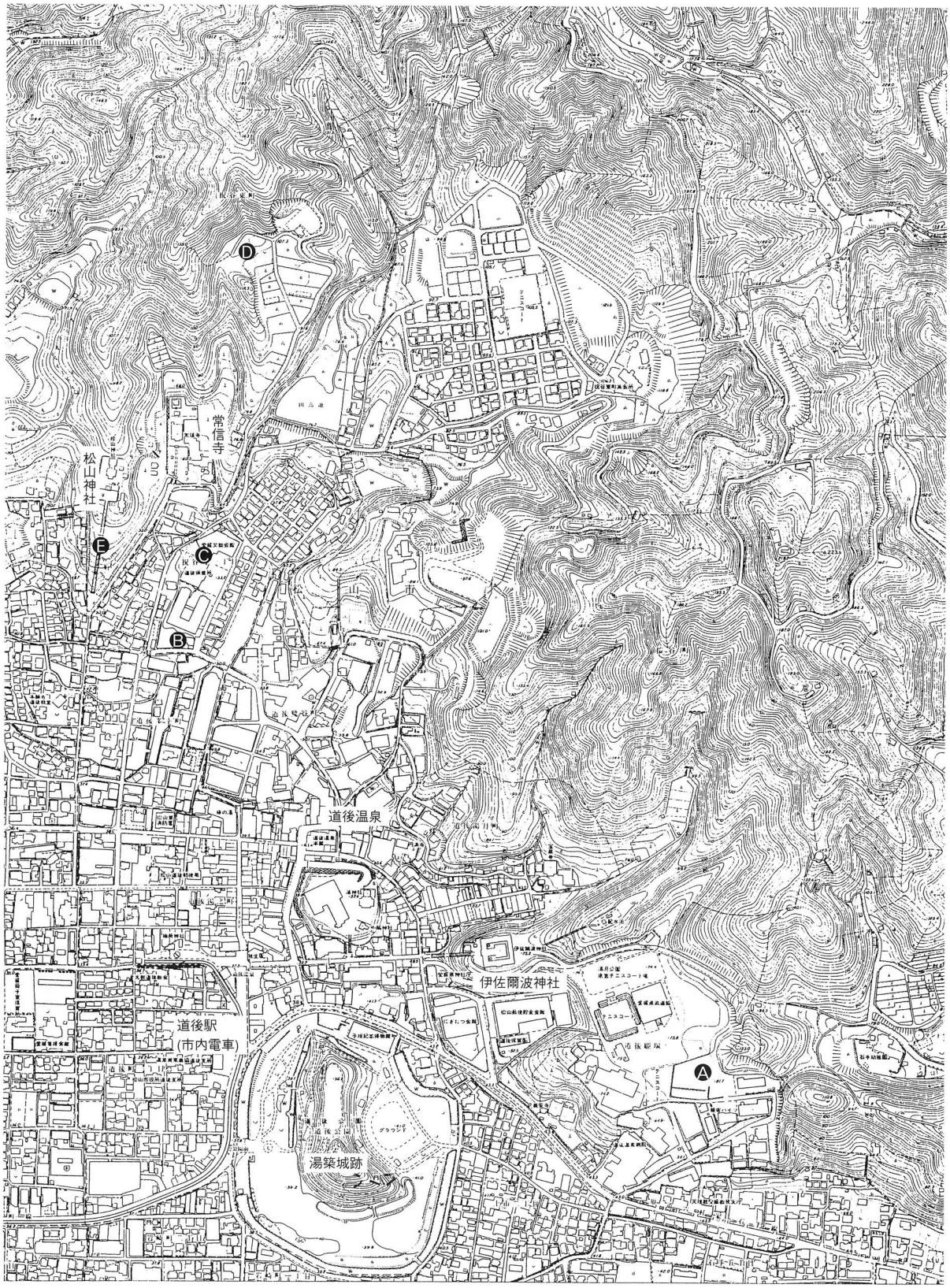
資料は採取地点ごとに提示するが、記述に際しては便宜上、Ａ地点～Ｅ地点と呼称することにし、運搬した順序で掲載することにする。また、報告のはじめには採取時の様子について関氏の回想文があるので、抜粋して掲載し、回想文の後には「(関)」と付加した。

２．採取資料

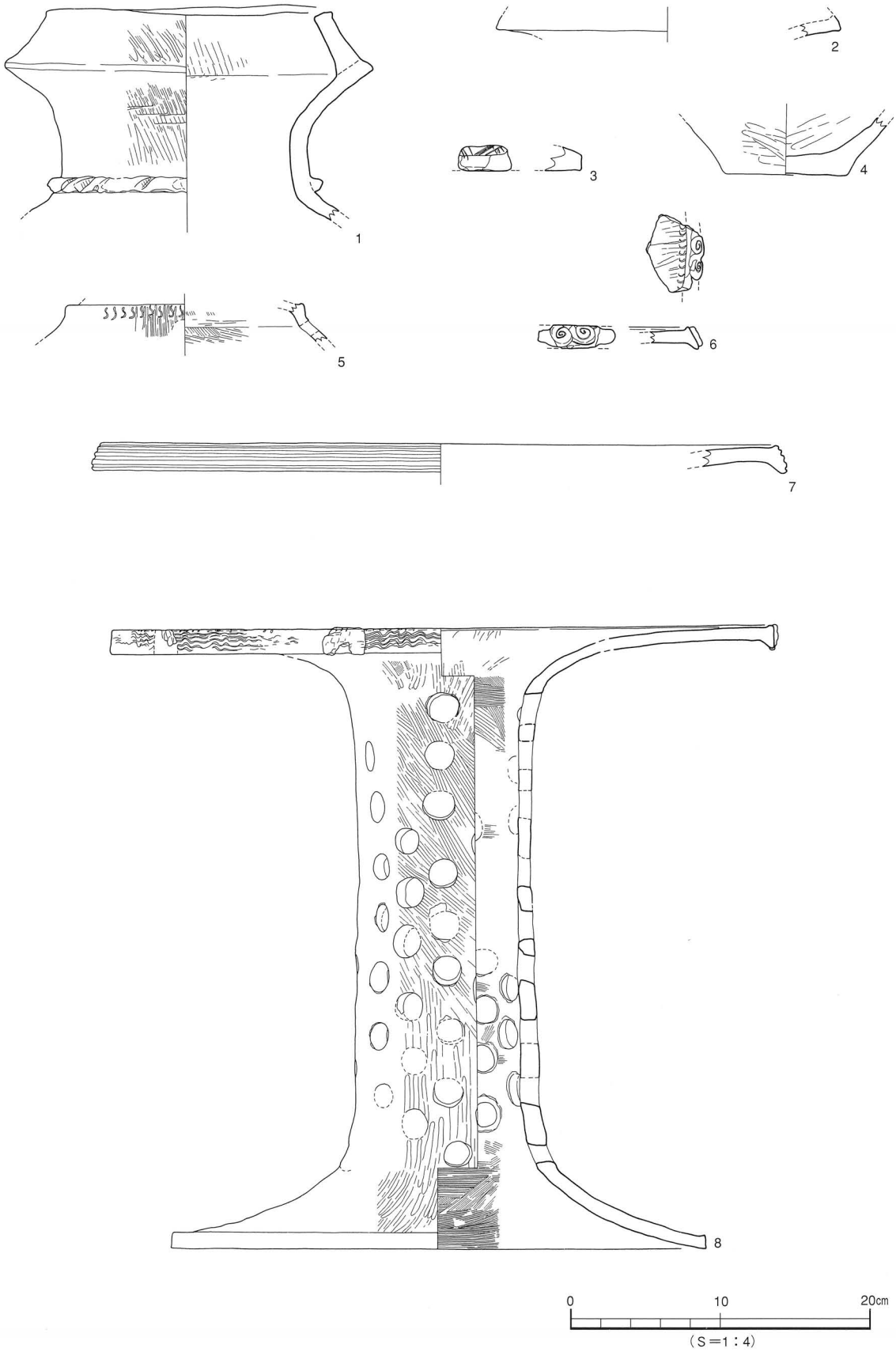
(1) Ａ地点（第21・22図、図版10）　道後姫塚140番地、現在の愛媛県武道館あたり

昭和26年、義安寺の裏山で孔のあいた器台を採取したのは、この頃ではないかと思われます(関)。

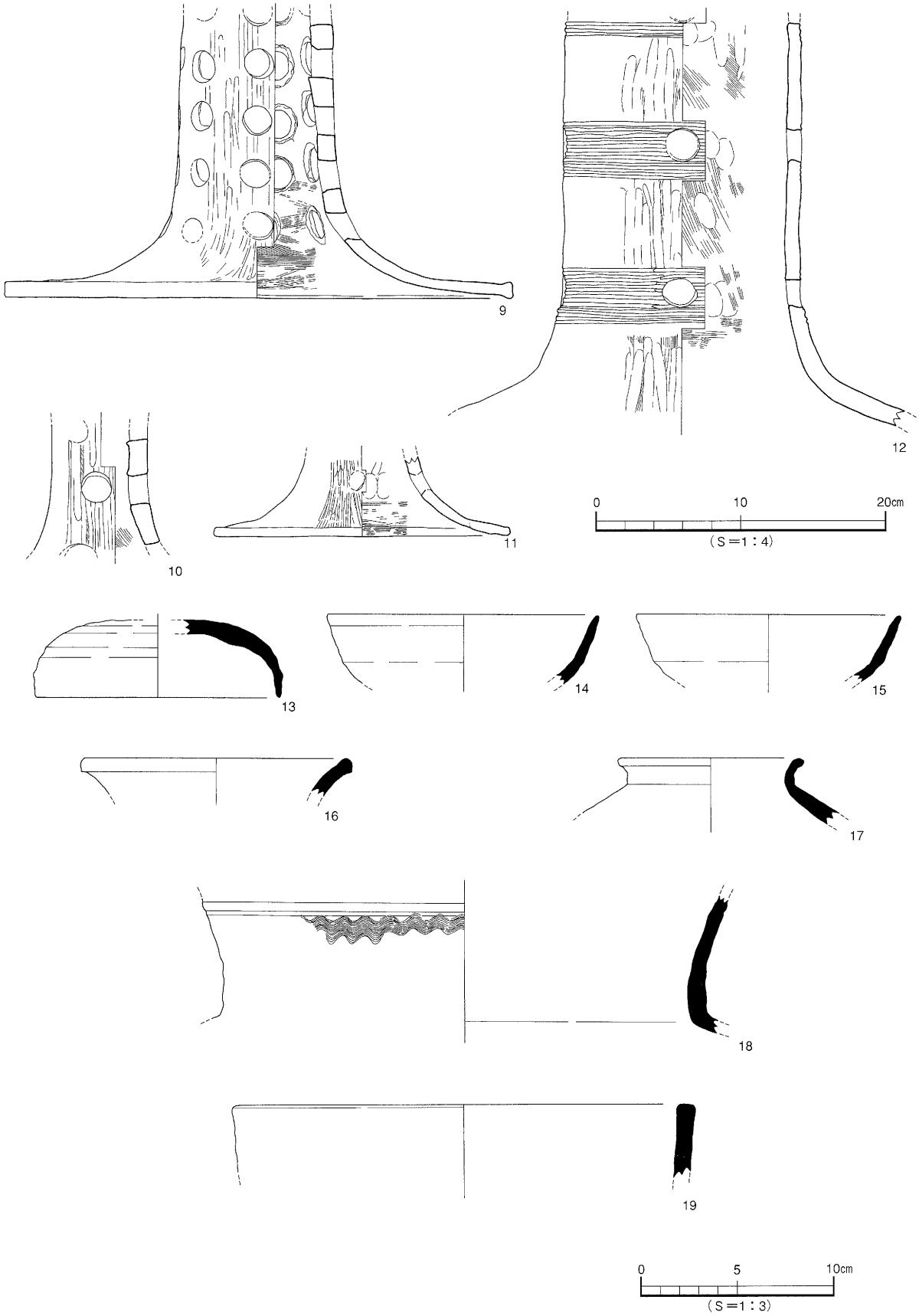
当時は、丘陵地になっており、尾根部で土器（第21・22図の１～19）を採取している。１～12は弥生土器で、弥生時代後期後葉～終末期の壺（１～４）、高坏（５）、器台（６～12）になる。13～19は須恵器で、古墳時代６世紀後半～７世紀の坏蓋(13)、高坏(14・15)、壺(16・17)、甕(18)、鉢(19)になる。



第20図　関氏資料採取地点（S＝1：8,000）



第21図　A地点出土遺物実測図(1)



第22図　A地点出土遺物実測図(2)

(2) B地点（第23・24図、図版11） 松山市祝谷町１丁目５の南端、現在のマンション（チュリス道後）の南隣あたり

昭和20年４月、洪水の際に出来た掘割で土器片を拾いました。昭和24（1949）年、貝塚らしい所の掘割は、この頃に何度も行ったように思います（関）。

B地点出土品は、第23・24図の20～38である。20～37は弥生土器で、20～35は前期末～中期の甕(20～23)、壺（24～34）、高坏（35）、36・37は後期後葉～終末期の鉢（36）、大型壺（37）になる。38は埴輪で、５世紀～６世紀前葉の底部片である。なお、貝塚の貝は採取していない。

(3) C地点（第25・26図、図版12・13） 松山市祝谷町１丁目10（グランド下）と、祝谷町１丁目11～15（グランド上）

昭和20年８月、グランド下（元の陸上競技場：現在の文教会館のあるあたり）は一面の畑でした。戦後に逓信省の官舎が建ったので、瓦を拾ったのは官舎の建つ以前だったと思われます。瓦はグランド上（元の野球場：現在は住宅地）でも拾ったように記憶していますが、多かったのはグランド下の方です。……昭和21（1946）年４月、土器片や瓦もよく拾いました（関）。

採取品は、第25・26図の39～51である。39～50は瓦で、古代に比定される。このうち、39は複弁八葉蓮華文瓦になる51は弥生土器で、弥生時代後期の壺になる。

(4) D地点（第27図、図版13） 松山市祝谷東町、常信寺の北東約200mの畑地

昭和25（1950）年４月、大型の壺棺はこの頃に採取したのかも知れません（関）。

採取品は、第27図52である。52は弥生土器で、弥生時代後期後半の大型複合口縁壺になる。ほぼ完形品で、器高77cm、口径36cmを測る。

(5) E地点（第27図、図版14） 松山市祝谷東町640、松山神社参道階段の中ほど東

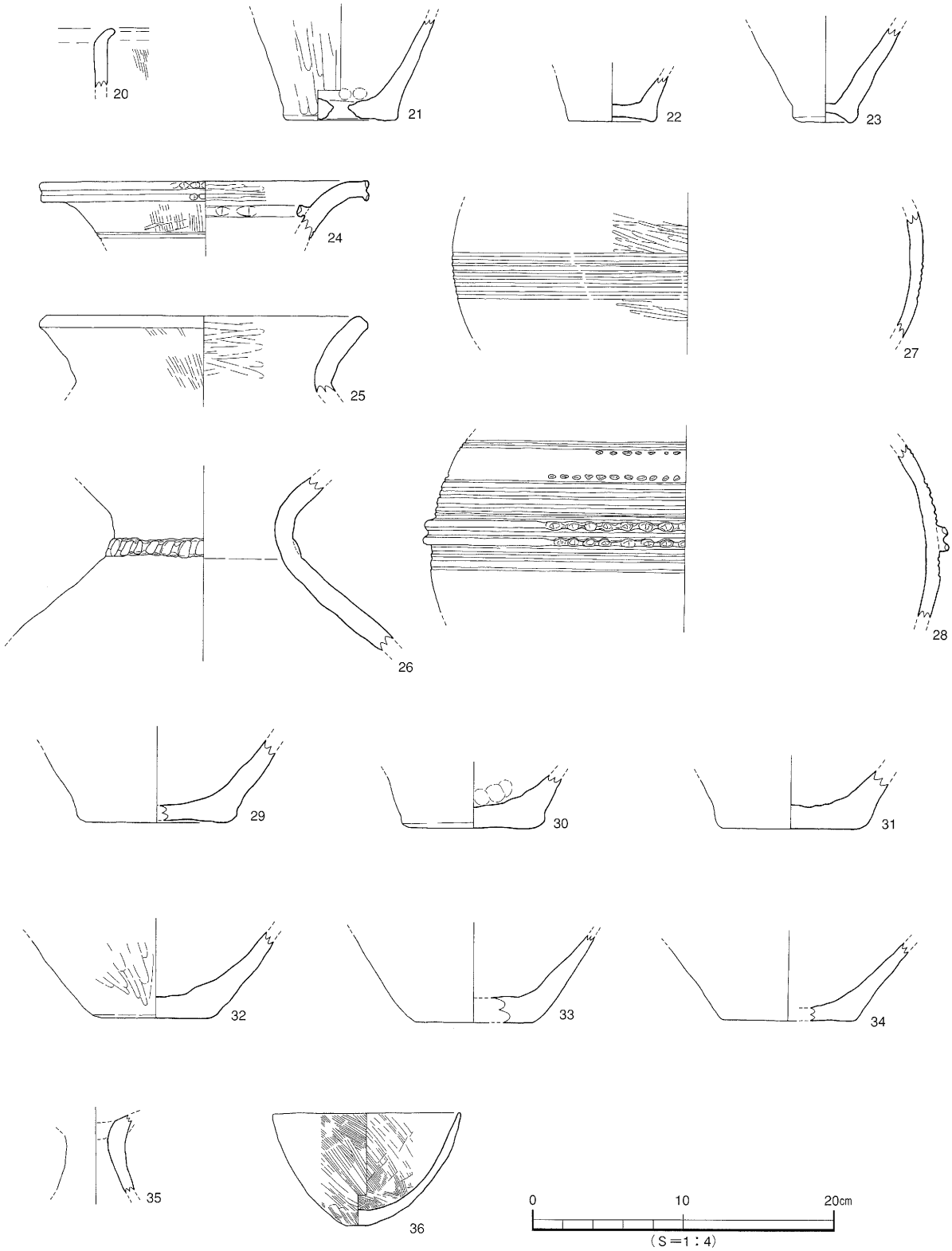
昭和23（1948）年4月、松山神社の参道脇でモモの種子(植物学的には果実)を採取したのは、この頃ではないかと思います。モモの果実を山本四郎先生に見せて、愛媛新聞に掲載されました(関)。

採取品は、第27図53、図版14炭化材・モモ種子である。53は鉄製品で、古墳時代の鉄鏃になる。炭化材は分析の結果カバノキ属の可能性があるものと、コナラ属アカガシ亜属であることが判明した。種子は、昭和26年の鑑定と同じく、モモの種実と同定された。

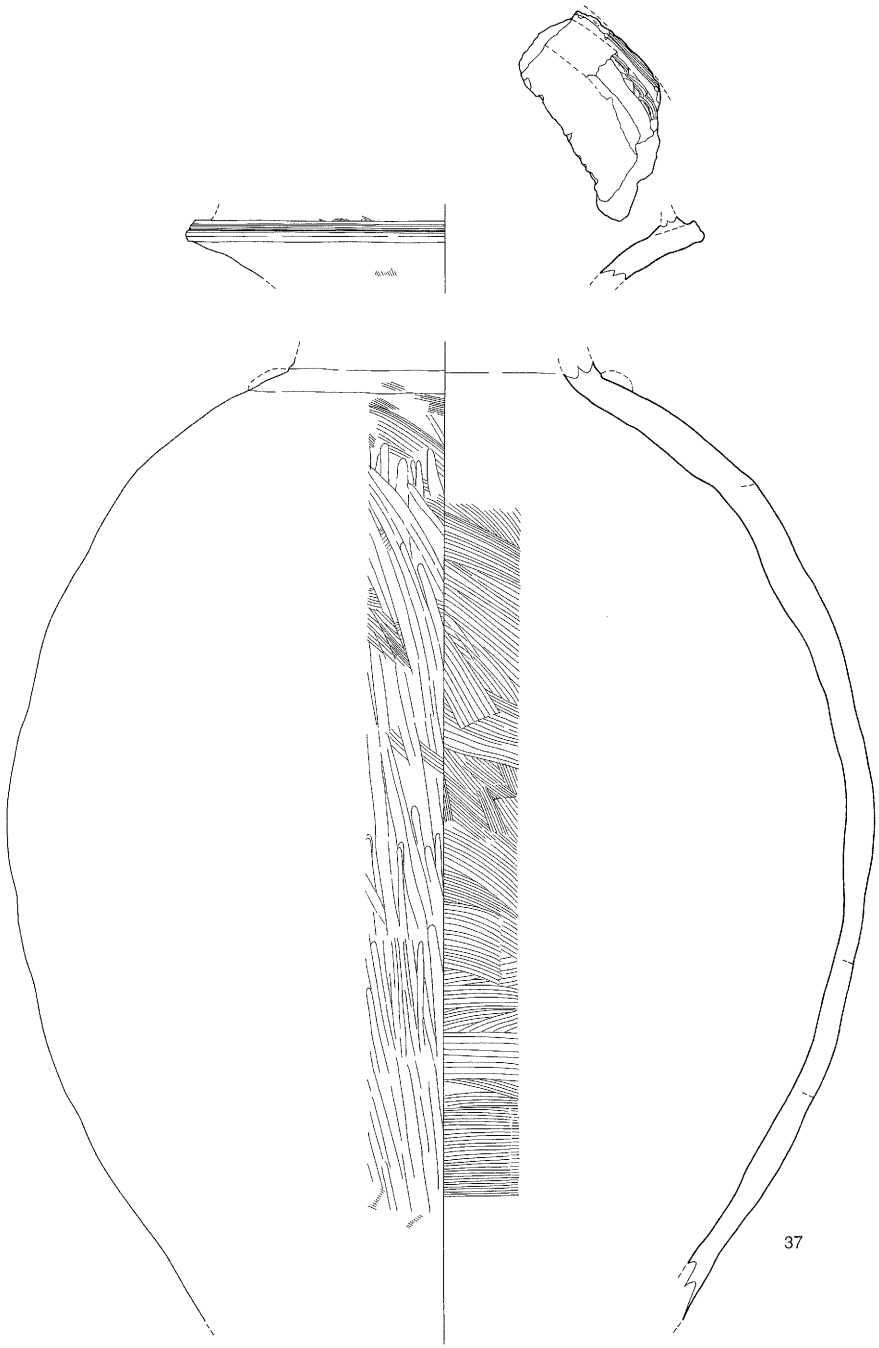
(6) 出土地点不明品（第28図、図版14・15）

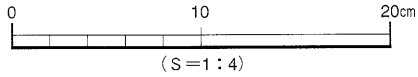
第28図の54～65と図版14の人骨は、出土地点を特定できなかった遺物である。54は弥生土器で、弥生時代後期の壺。55は土師器で、古墳時代６世紀の高坏。56～63は埴輪で、５世紀末～６世紀前葉の朝顔形埴輪（56～58）、円筒埴輪（59～63）である。64は土師器で、中世の三足釜の脚になる。65は石製品で、時期は不明。人骨は、人類学ミュージアム館長松下孝幸氏の鑑定によれば、中世かそれ以前の可能性が考えられている。

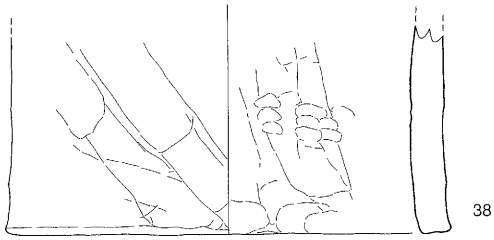
なお、名本氏によれば、土器55と人骨はA地点の義安寺裏山から採取したものではないかとの助言を受け、かつ、人骨は板石の石棺のなかにあったものではないかとの指摘を得ている。

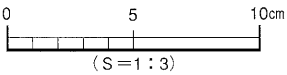


第23図　B地点出土遺物実測図(1)

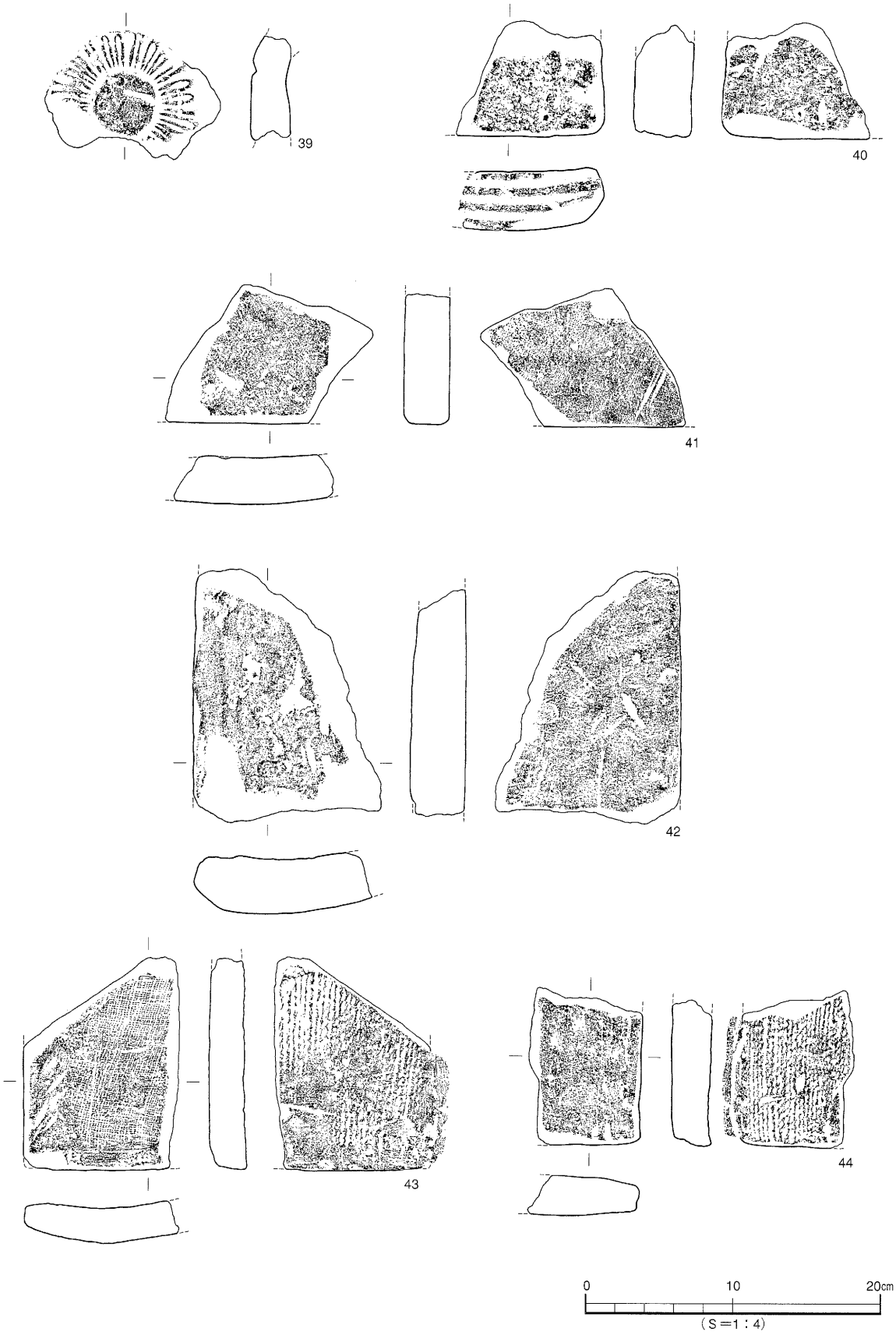




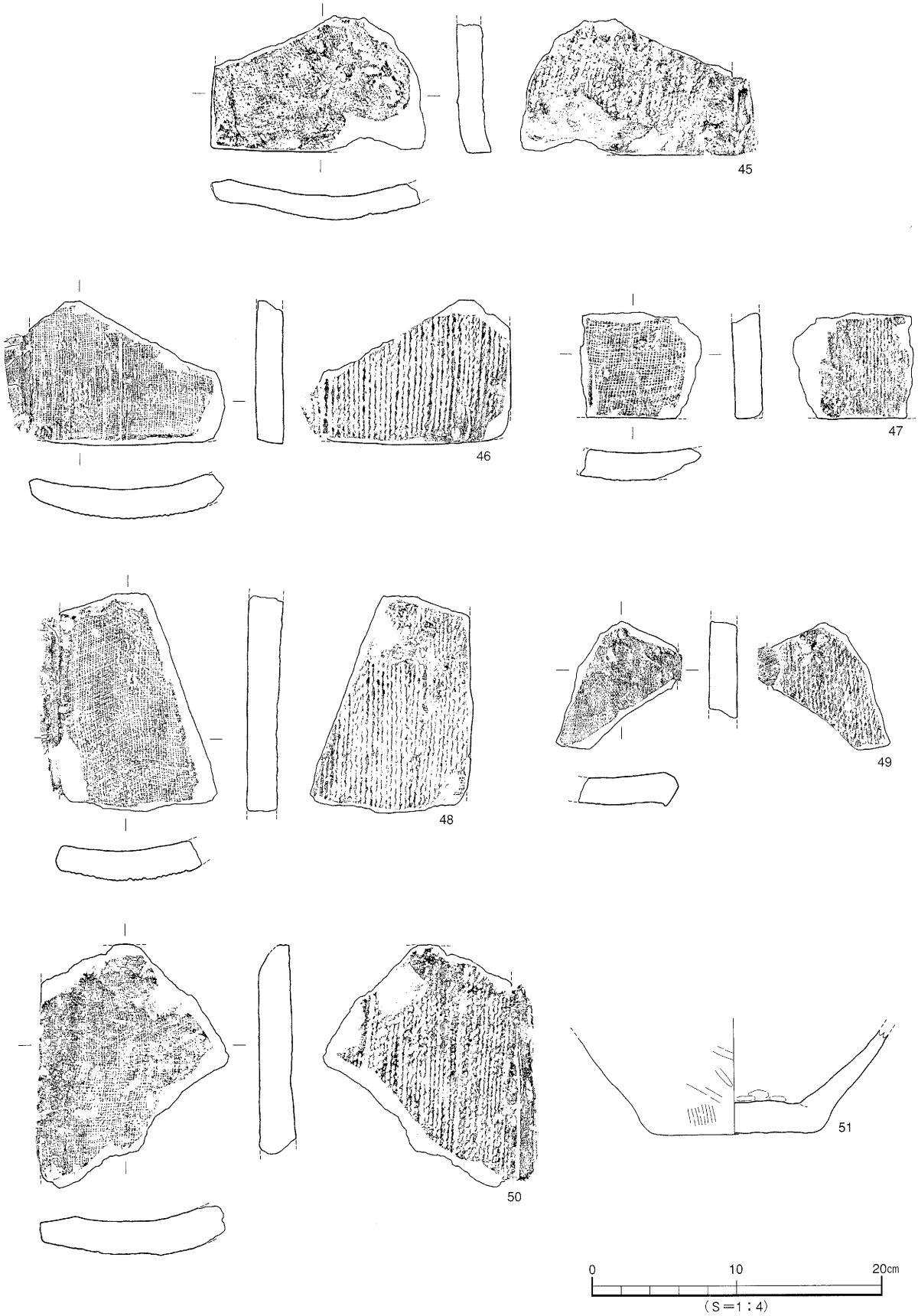




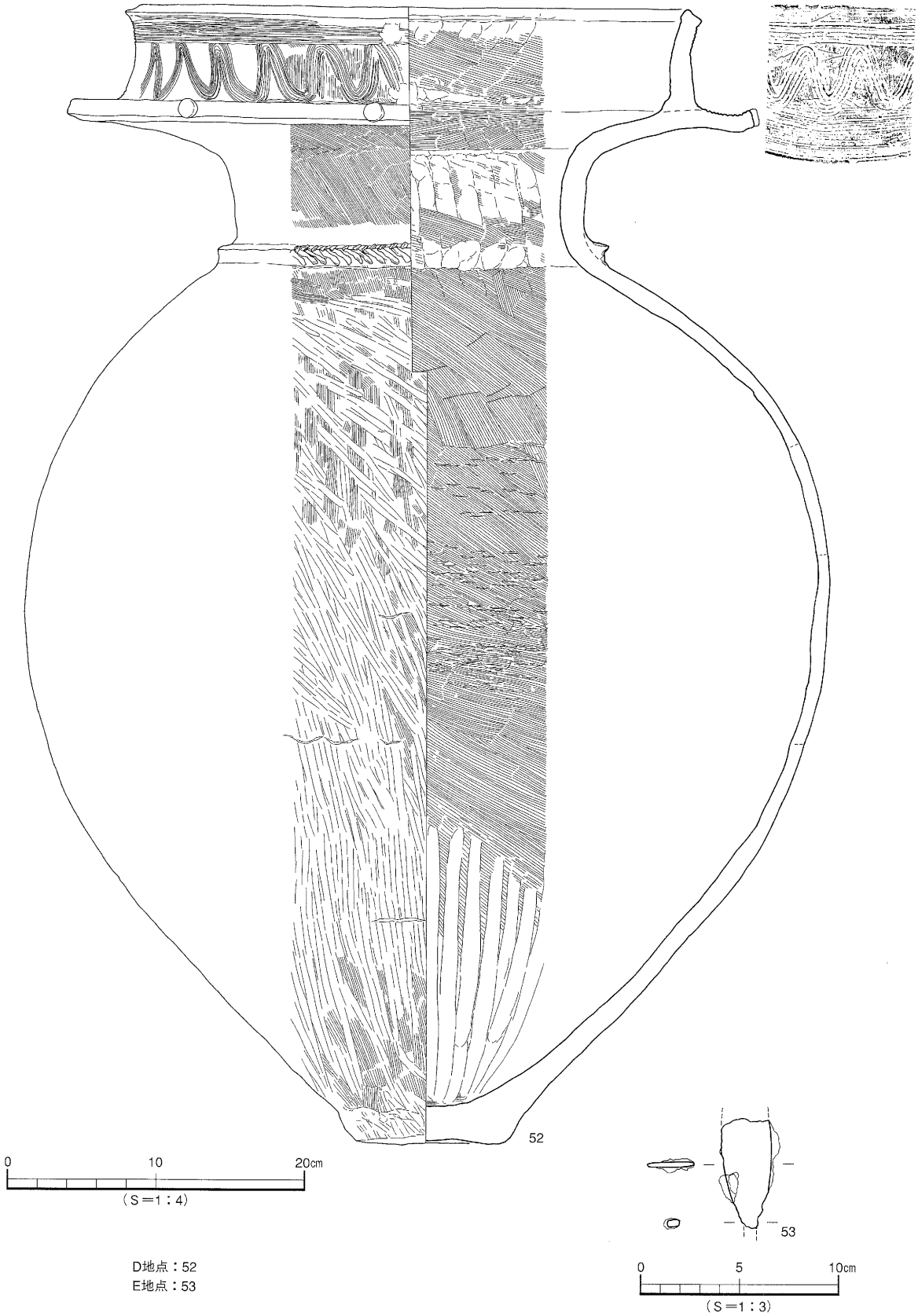
第24図　B地点出土遺物実測図(2)



第25図　C地点出土遺物実測図(1)



第26図　C地点出土遺物実測図(2)



D地点：52
E地点：53

第27図　D・E地点出土遺物実測図

3．分　析

ここでは本資料について、松山平野での類例や、道後地区での資料の位置付けを考察してみる。

A地点出土品では、1～12の弥生土器は、狭い範囲で出土したとのことであり、同時性が高い一群の資料の可能性をもつ。弥生時代後期後葉～終末に松山平野では、土器を一括廃棄もしくは一地点に集中廃棄する例があり、本例はこの類と考えられる。特に、器台が多いことは注目され、器台8は円孔が多数穿たれ、松山平野の典型的加飾法が顕著に現れている。13～19の須恵器は、道後地区の山麓は後期の群集墳地帯であり、古墳に伴う資料であろう。

B地点では、弥生時代前期末～中期前葉の土器が出土し、貝殻も検出されていたとの話である。松山平野の北に位置する北条市の南宮ノ戸遺跡は丘陵上の同時期集落で、ここでも土器と貝殻が多量に出土しており、同様な様相を示している。よって、B地点一帯は、集落跡で、同地点は地形上集落の端に位置しているものと考えられる。37は大型壺で口縁部に赤色顔料がみられ、壺棺の可能性をもつ。38の埴輪は、丘陵上にある古墳からの流入品とみてよい。

C地点出土品は、1点の弥生土器を除き、瓦で占められる。C地点はグランドになっていた。グランドの造成は、人力で作業が行われたようで、遺物は同地点もしくは造成土を近隣から運び込んだとしても、道後地区内の出土品であることは間違いないであろう。道後には、古代寺院が二院あったとされている。一つは、現在の道後公園東北部に内代廃寺が推定され、もう一つは湯之町廃寺が存在したように言われている。湯之町廃寺の位置は、石田茂作が伊予鉄道の大グランドをその候補地にあげており、本資料は石田があげた地点と一致する。石田が提示した資料は戦時に消失しており、本資料は極めて重要な資料といえる。

D地点出土品は、出土地点や器種、法量から壺棺の可能性が高い。弥生時代後期後半、松山平野では大型複合口縁壺を棺にする墓制があり、その一つといえる。壺棺は、当平野では数基が群集する傾向にあり、出土地点周辺でのさらなる発見が期待される。

E地点出土品では、鉄鏃は古墳の副葬品とみられるが、木炭や果実の出土は、当平野の古墳調査では稀薄で、出土地点の性格は判断しがたい。

4．おわりに

本資料は、関太郎氏の熱心な採取活動とご両親の尊い保管によって、現在に残ったものである。その一方、関氏の回想では「昭和29（1952）年にはグランドには住宅がたくさん建ち、土器片や瓦の散乱している環境がしだいに無くなっていた……」とあり、多くの遺物や遺構はすでに昭和前半期に消滅してしまったことが読みとれる。

今回、関資料に触れ、もちろん貴重な資料を新しく発見出来たことは慶ばしいことであるけれども、それ以上に、適切な採取活動や保管の重要性を痛感するにいたった。

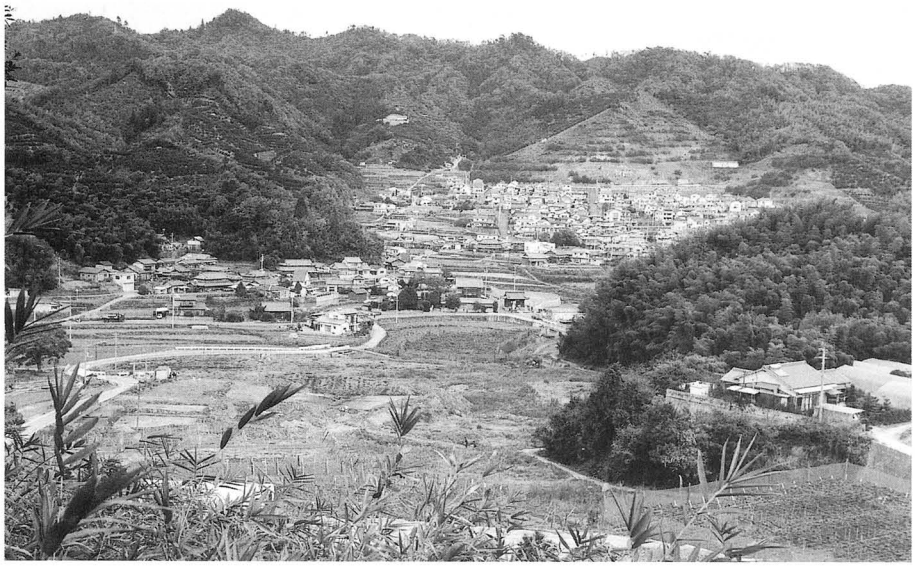
最後に改めまして、資料提示の機会を与えてくださいました関太郎氏とご両親に敬意を表するとともに、感謝いたす所存であります。また、名本二六雄氏には、資料に関する助言や諸資料の提供を受けました。お礼申し上げます。

〔参考文献〕

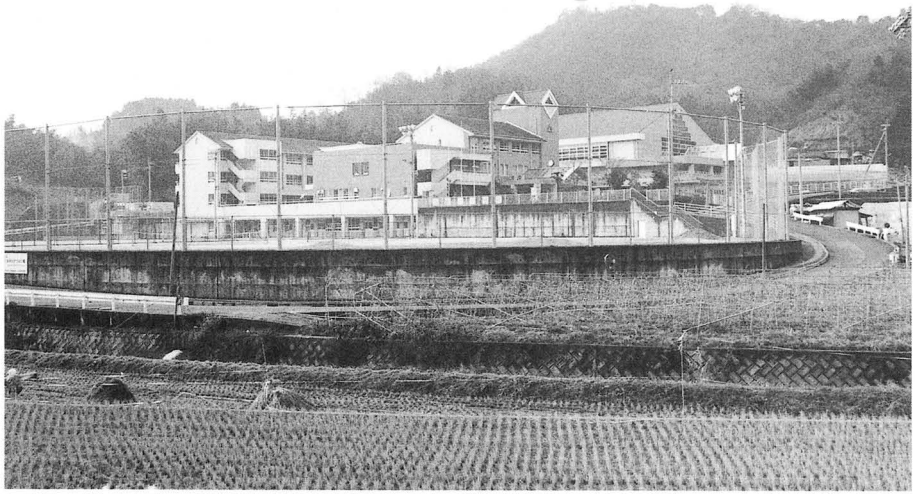
石田　茂作　1936「湯之町廃寺」『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房
名本二六雄　2000『考古学論集』晴耕雨読
名本二六雄　2001「愛媛県弥生時代墓制の研究」『遺跡』38号 遺跡発行会

図版一

1．調査前遠景(1)（北より）



2．調査前遠景(2)（南より）



3．調査地現況（北より）

図版二

1．A区の調査(1)（西より）

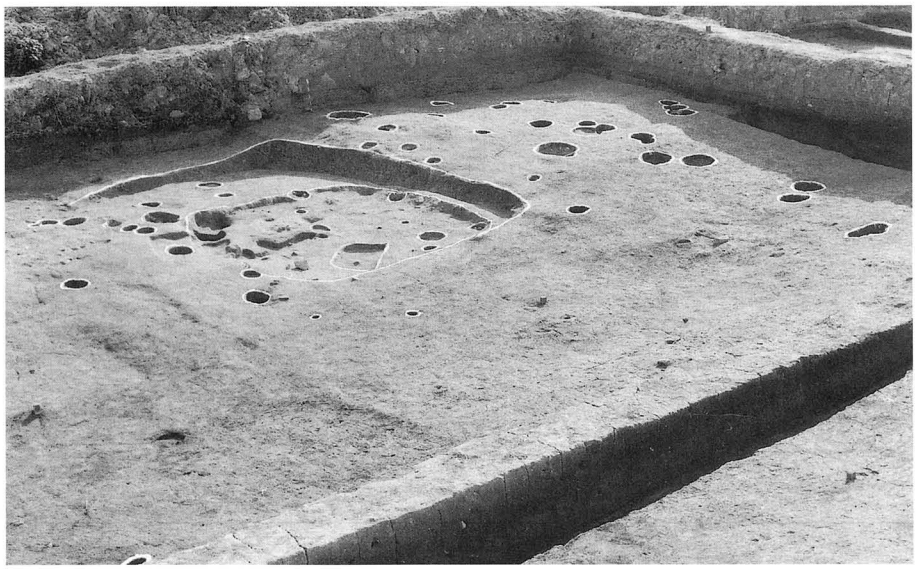
2．A区の調査(2)（東より）

3．SK４遺物出土状況
（北西より）

図版三

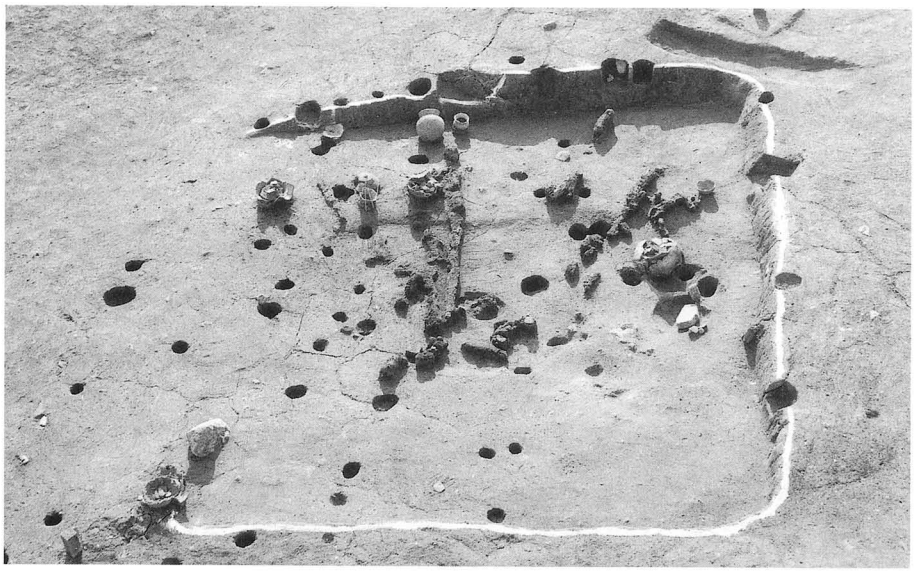
1．SX１遺物出土状況
（北東より）

2．Ｂ区の調査（北より）

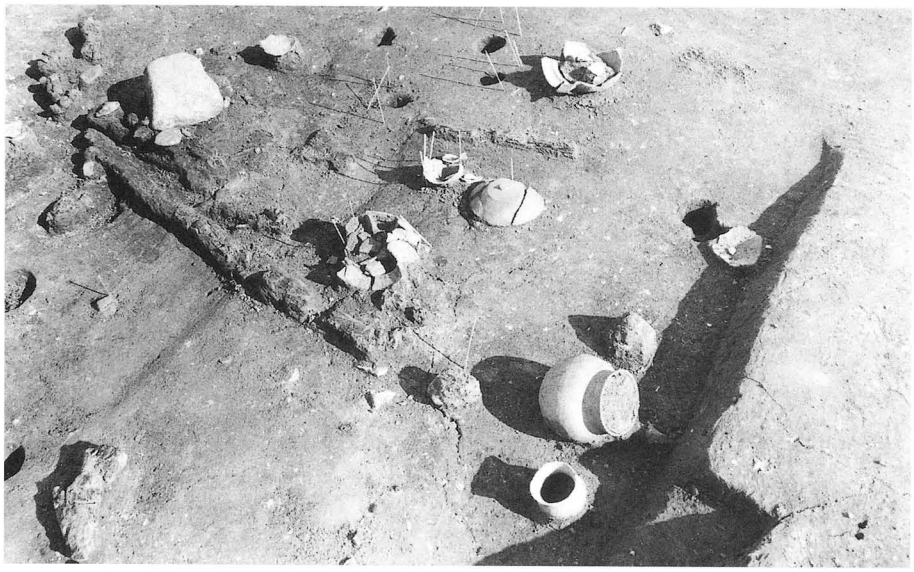


3．SB３・４完掘状況
（北より）

図版四



1．SB５遺物出土状況(1)
（東より）

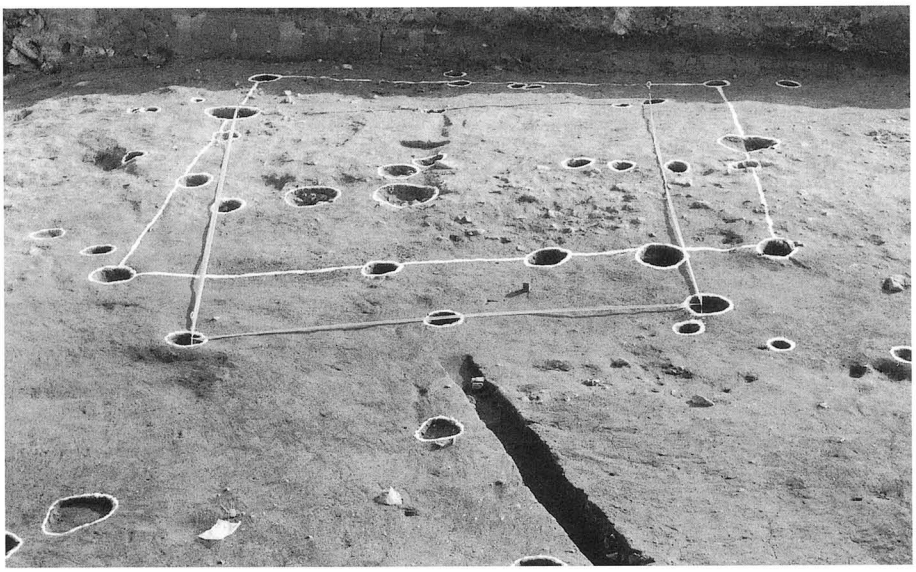


2．SB５遺物出土状況(2)
（北西より）

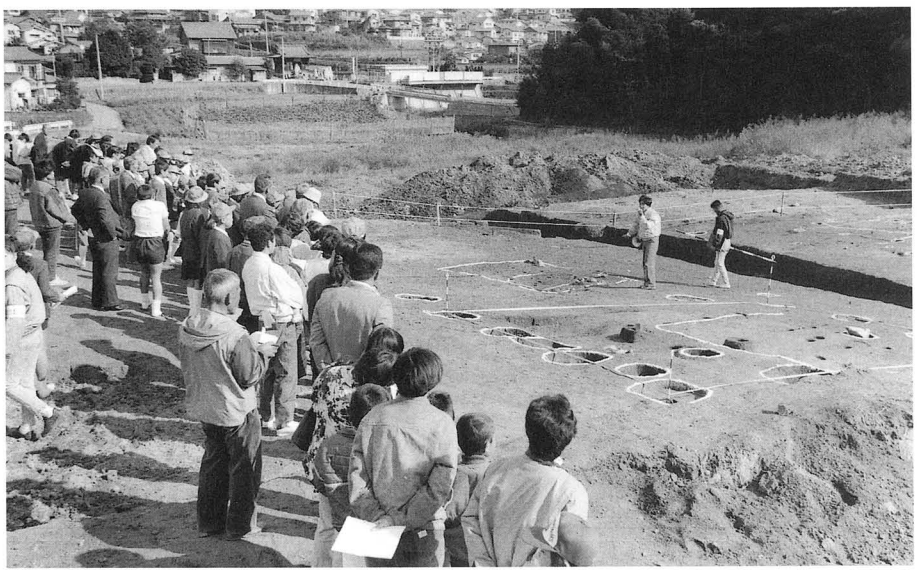
3．SB２・掘立２完掘状況
（北東より）

図版五

1．掘立１完掘状況
（南西より）

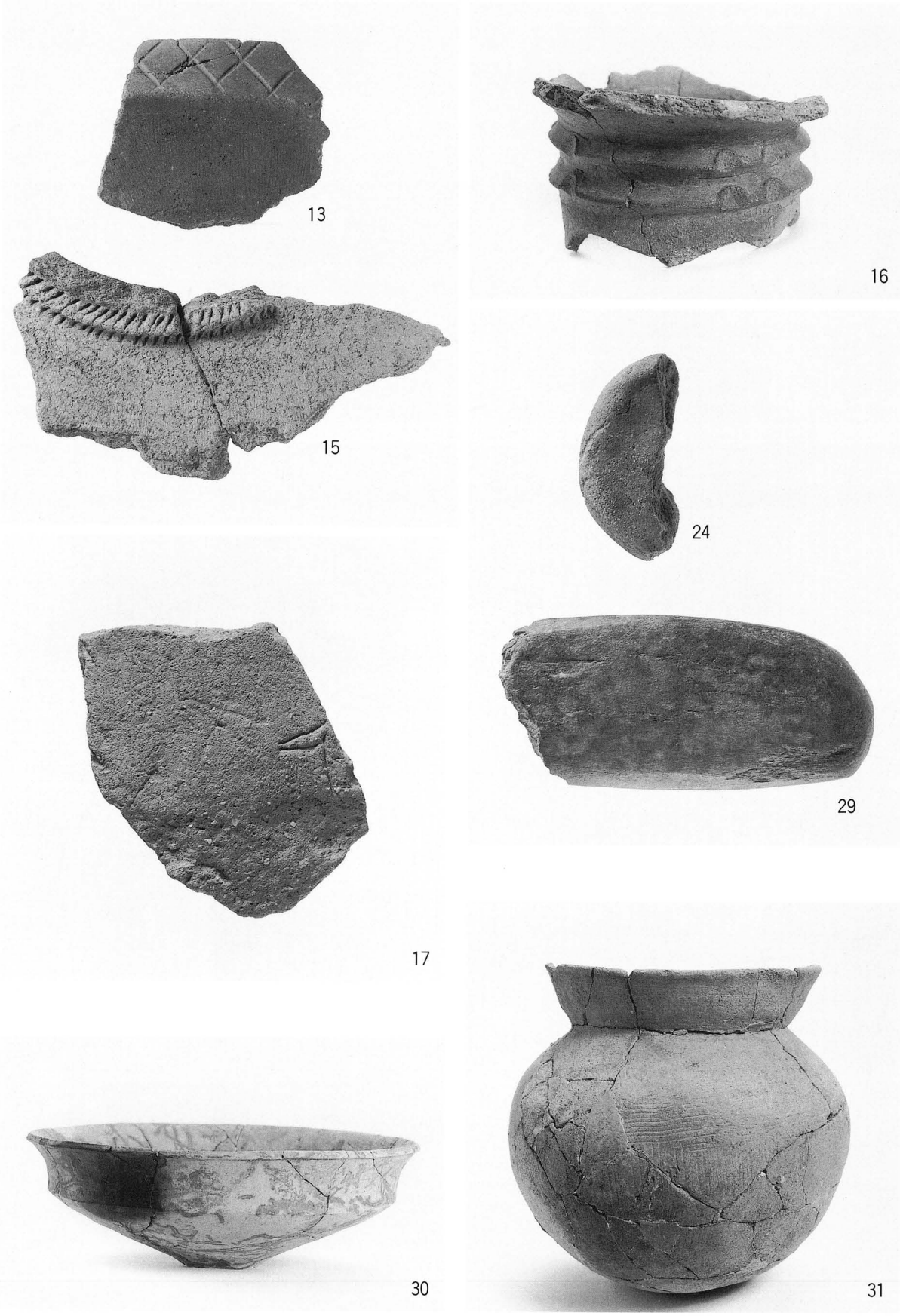


2．掘立５・６完掘状況
（北より）



3．現地説明会（西より）

図版六



1．出土遺物（SX 1 ：13・15～17・24・29　SD 3 ：30　SB 5 ：31）

図版七

32

33

34

40

38

41

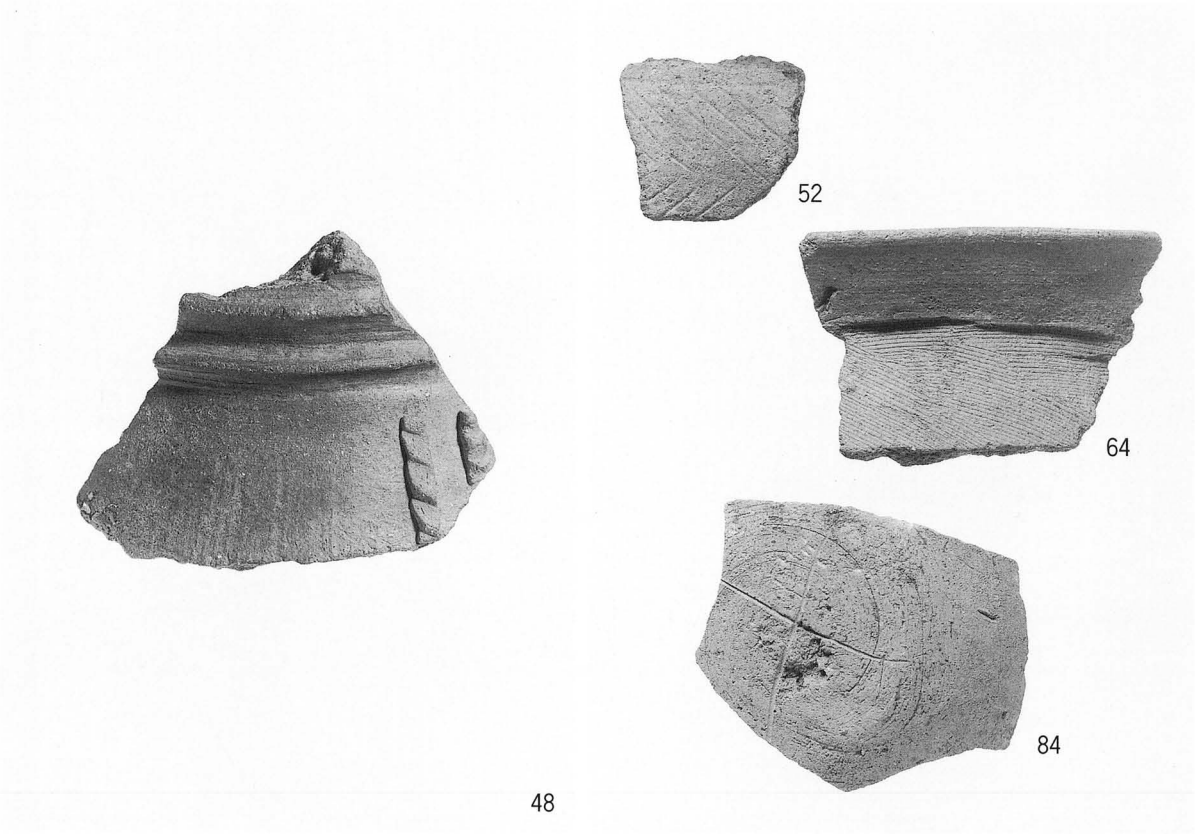
39

42

1．出土遺物（SB５）

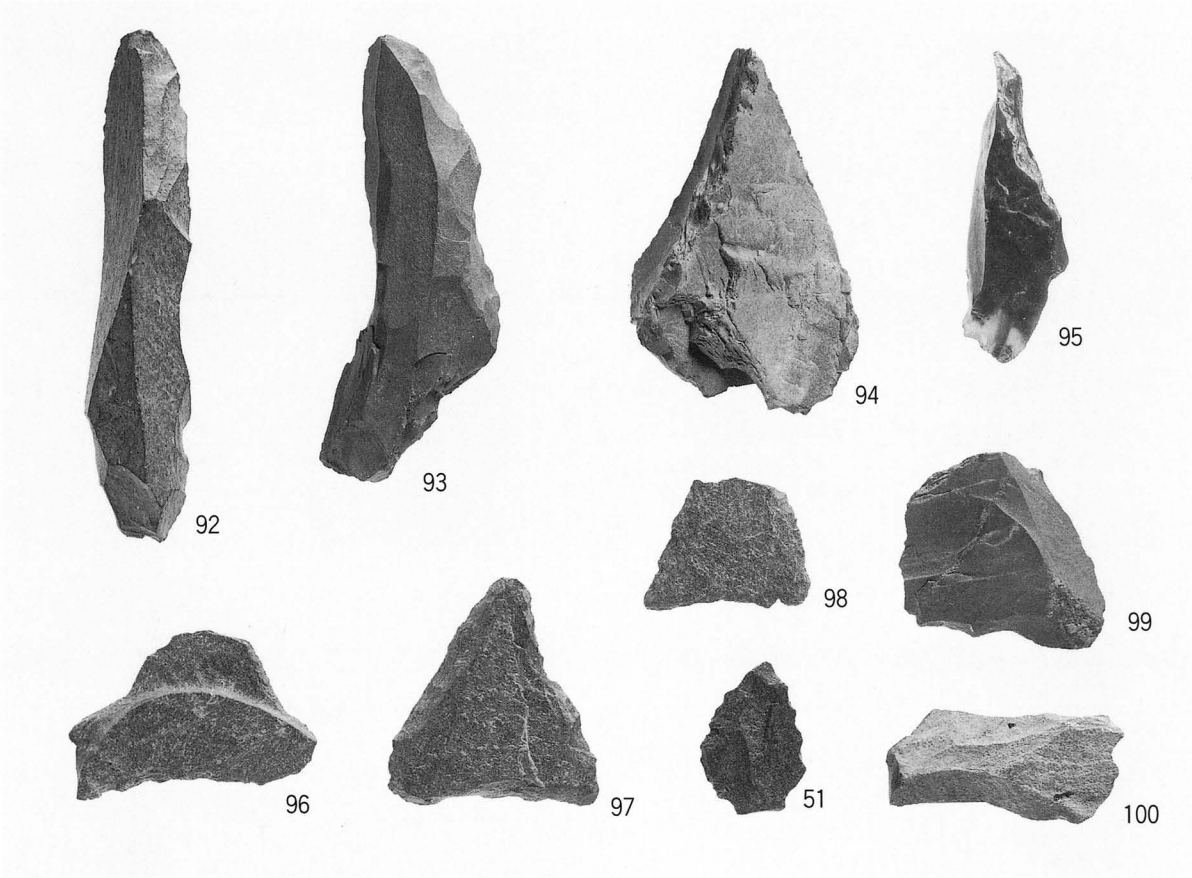
図版八

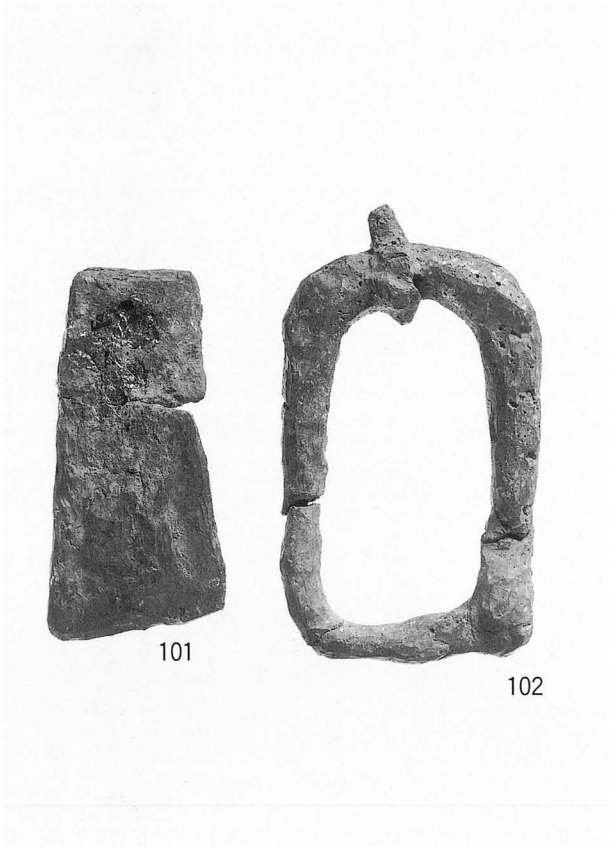
1．出土遺物（SB２）



2．出土遺物（掘立１：48　Ｂ区包含層：52・64・84）

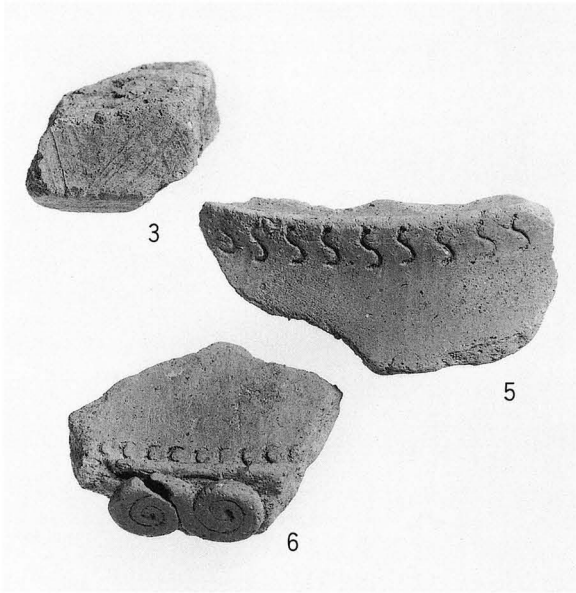
図版九

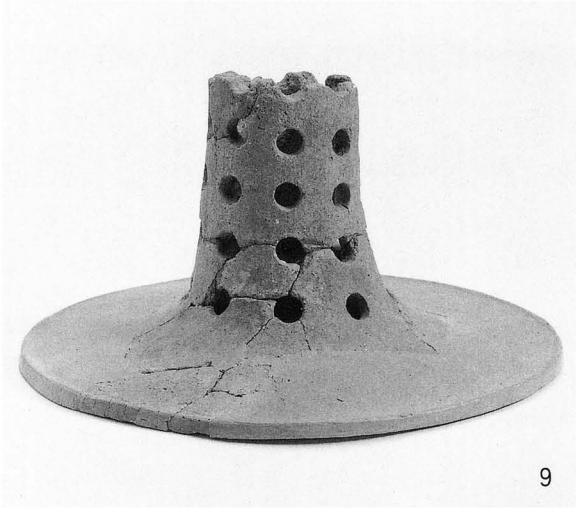




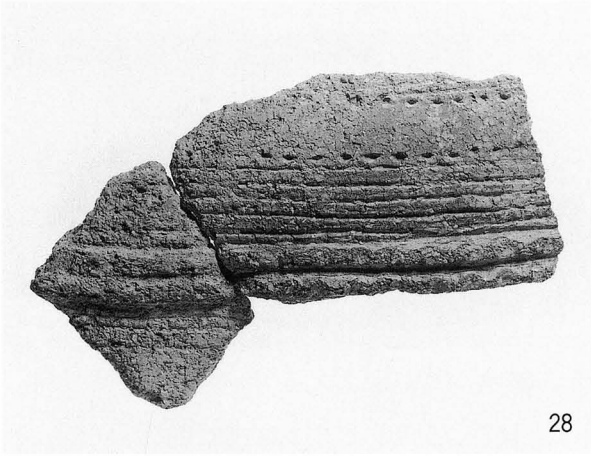
1．出土遺物（掘立１：51　Ｂ区：92～102）

図版一〇

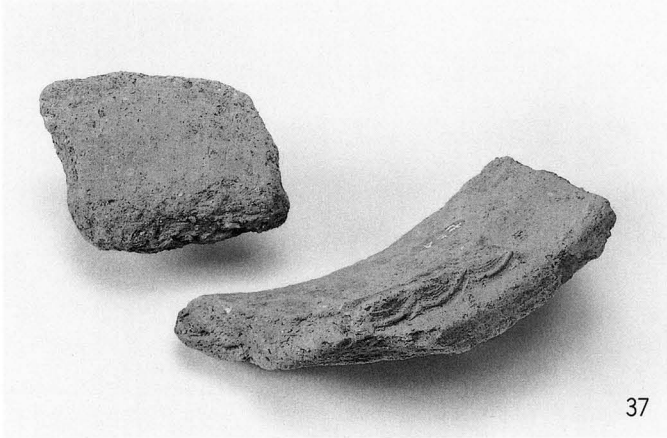


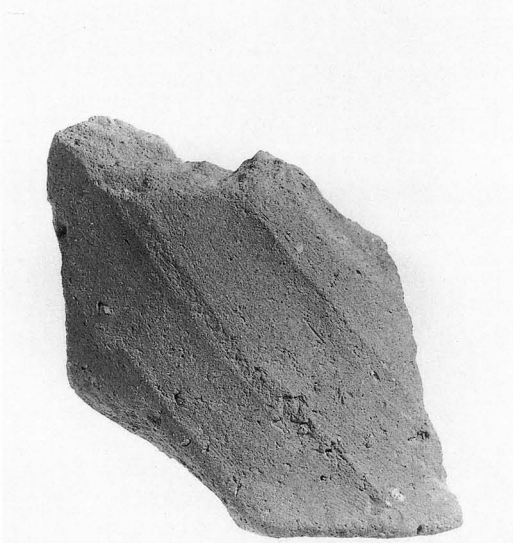


1．Ａ地点出土遺物

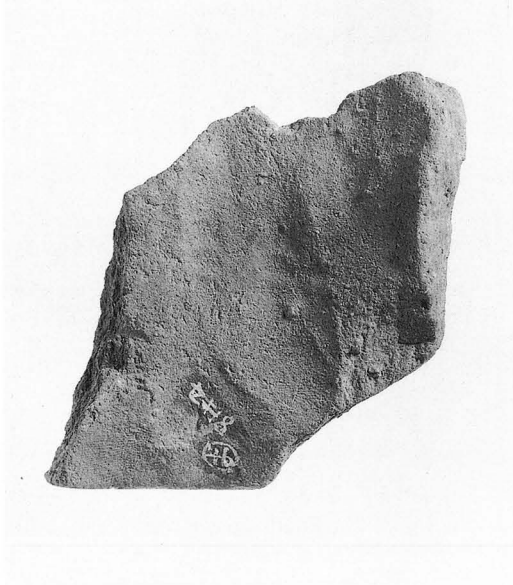

28

36


37

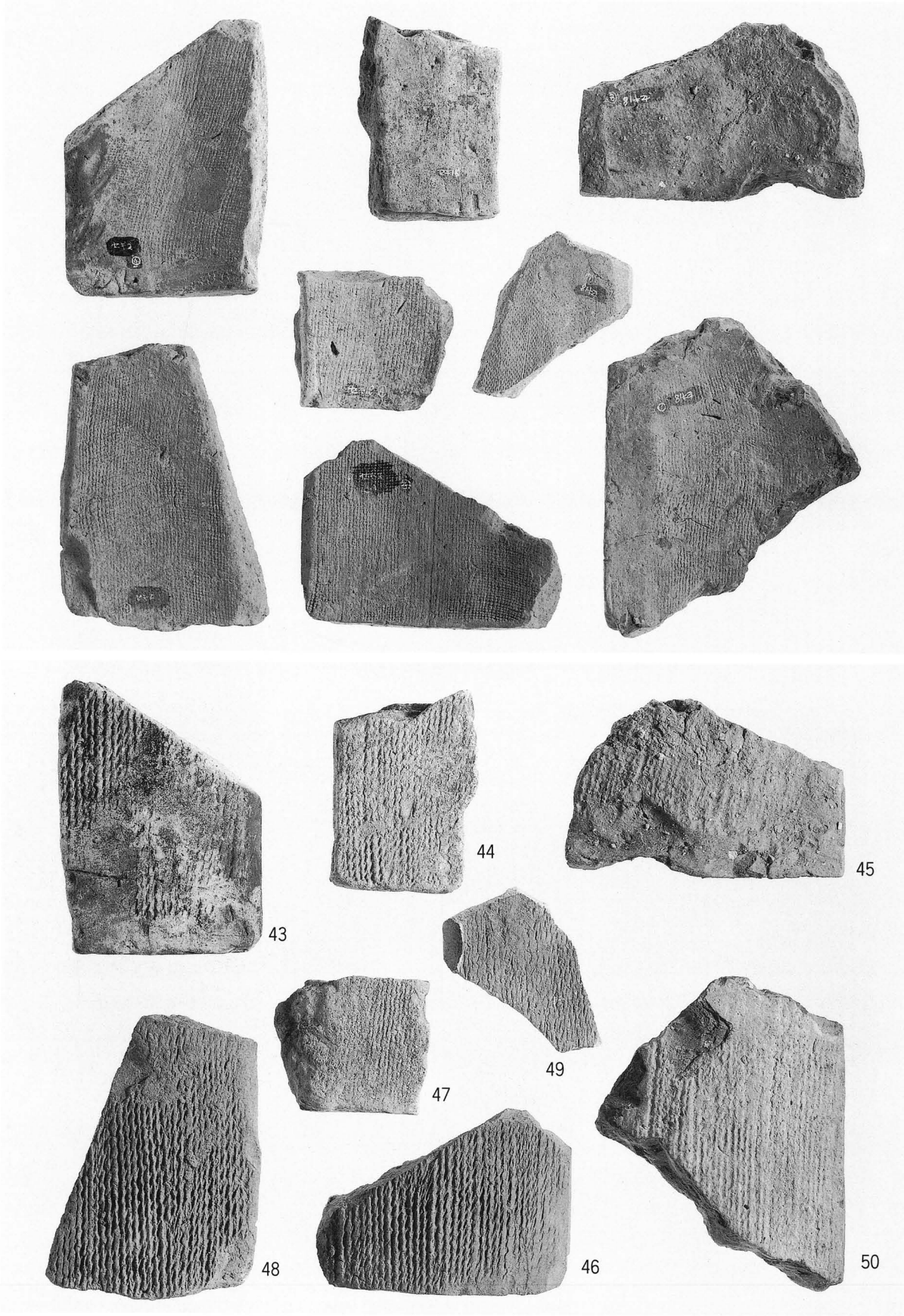

38

37



1．Ｂ地点出土遺物

図版一二

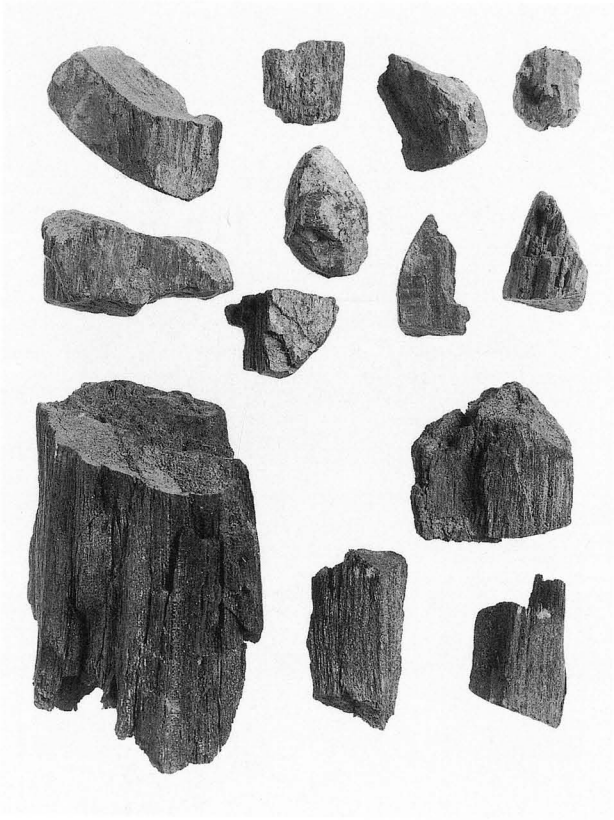


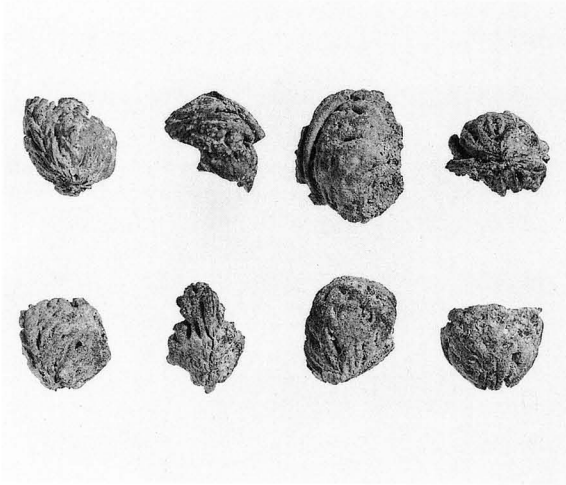
1．C地点出土遺物(1)

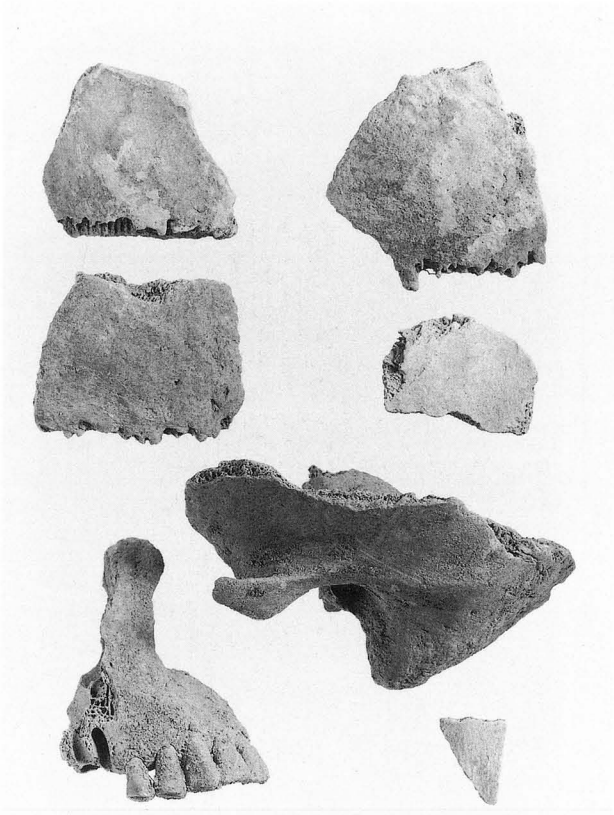
1．Ｃ地点出土遺物(2)

2．Ｄ地点出土遺物

図版一四

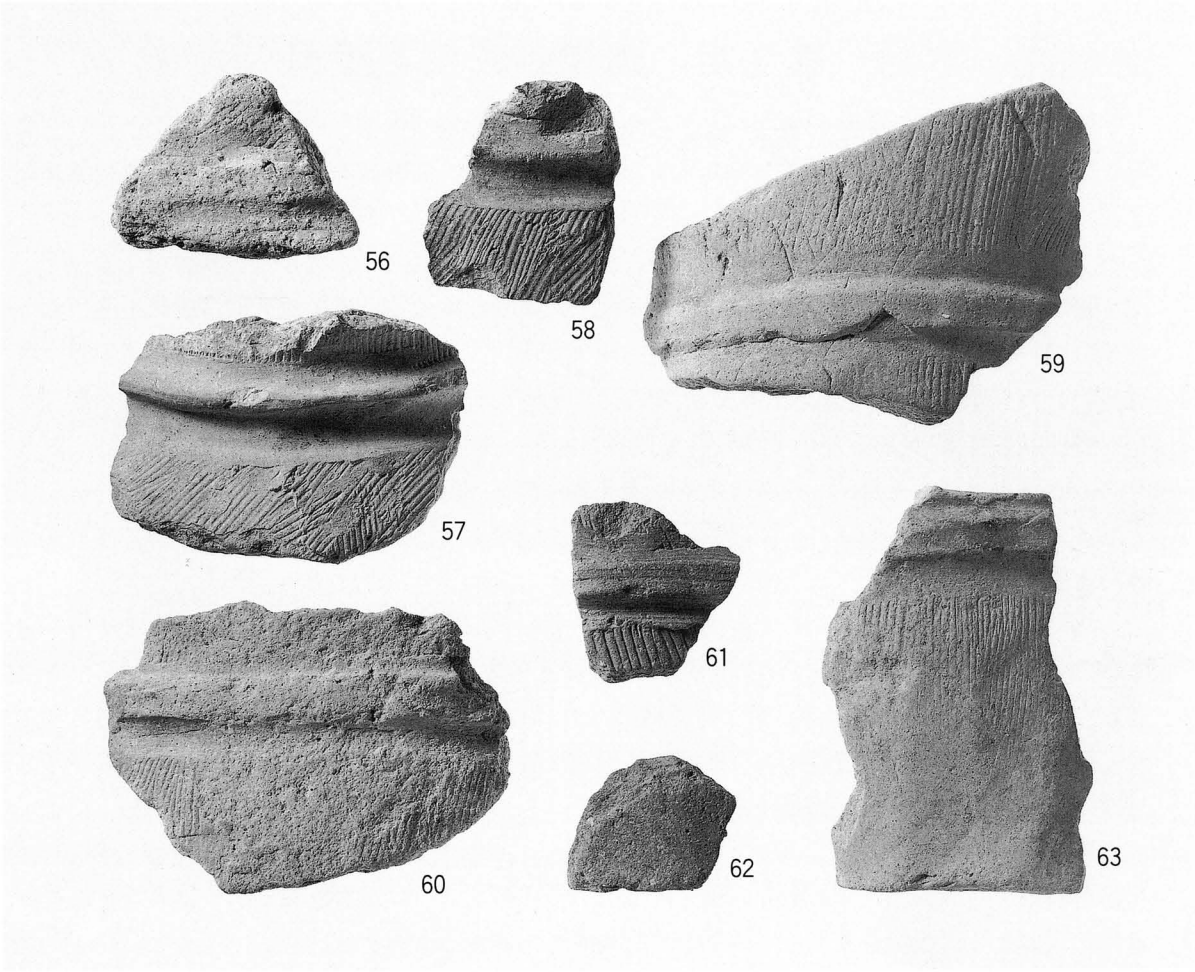






1．出土遺物（E地点：53・炭化材・モモ種子　地点不明：55・人骨）

図版一五



1．地点不明遺物

第３章　調査の成果と課題

本書では、伊台惣部遺跡の調査報告、道後地区採取品の資料提示を行った。ここでは、本格的に調査を実施した伊台惣部遺跡のまとめをする。伊台惣部遺跡の発掘調査は、伊台地区の集落遺跡調査としては初例になるものである。

弥生時代：ＳＸ１は中期中葉にされるが、礫の集石が何を意図するのかは判断できなかった。これは平野に類例が稀少で、中村経田遺跡集石遺構（弥生時代終末期）や繁成分遺跡集石遺構（弥生時代後期以前）があるにすぎなく、いずれも性格が特定されていない。注目される遺物は第８図17は壺で、肩部にシカを描いており、松山平野では、祝谷六丁場遺跡にならび平野最古のシカの絵画土器になる。当平野ではこれまでに、シカの絵画土器は13例があり、全国でも出土量が多い地域である。

ＳＤ３は弥生時代後期中～後葉になり、出土物は遺存状況から同地での投棄品とみられる。また、ＳＢ４は平面形状や規模より、後期中～後葉にも比定することができ、ＳＤ３に伴って集落を形成する可能性がある。

古墳時代～古代：ＳＢ５は、完形品の土器が散在し、炭化材は部分的ではあるが、上屋構造をよみとることが可能な出土状況にある。よって、本住居址は焼失家屋として認定できるだろう。出土品は、特徴から古照Ⅱ式と同Ⅲ式の中間に位置付けられ、ＳＢ５は前半期でも新しい４世紀後半としておく。また、ＳＢ２は７世紀前半、ＳＢ３は規模や調査地内出土土器より６世紀末～７世紀前半になる。二棟は、同時もしくは前後関係の建物である。

時期不明遺構：掘立１・２は規模も掘り方も大きく、切り合いや位置関係より、竪穴式住居に後出する可能性をもち、古代～中世に比定されるだろう。掘立３～６は調査地内出土品から考えれば、中世に比定できる可能性をもち、本調査中で最も新しい遺構とされよう。

本調査によって、伊台地区の集落遺跡が部分的に明らかになってきた。群集墳が形成され、瓦窯址も存在するといわれており、調査が増加すれば、集落のさらなる発見がみられることであろう。資料が稀薄な地区だけに、大きな成果が得られたといえよう。

松山市文化財調査報告書　第85集

伊台惣部遺跡

平成14年３月29日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町６丁目６－１　ＴＥＬ（089）948－6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　ＴＥＬ（089）923－6363

印刷　セキ株式会社
〒790-0012　松山市湊町７丁目７番地１　ＴＥＬ（089）945－0111